

上田市文化財調査報告書第28集

琵 琶 塚

琵琶塚遺跡緊急発掘調査報告書

1987.3

上田市教育委員会
上小地方事務所

上田市文化財調査報告書第28集

琵 琶 塚

琵琶塚遺跡緊急発掘調査報告書

1987.3

上田市教育委員会
上小地方事務所

序

上田市小泉地区は東西に流れる浦野川を中心に、往古より人々が暮らしていた地域です。一帯には縄文時代からの埋蔵文化財や古墳が数多く存在し、また昭和50年の当地域の条里遺構分布調査では条里的地割も確認されております。

このたび、周知の埋蔵文化財包蔵地である琵琶塚遺跡が存在する小泉地区的県営圃場整備事業に伴い、貴重な文化財を記録保存するための緊急発掘調査が実施されました。調査団長に上田女子短大の塩入秀敏先生をお願いし、夏の猛暑と厳しいスケジュールの中、7月下旬から1ヶ月余りにわたり現場調査をいたしました。

その結果、弥生時代から平安時代にかけての竪穴式住居址や土壙・溝址などの遺構が検出され、またそれらに伴い、弥生時代の箱清水式土器をはじめ多くの遺物が出土しました。中でも上小地区初の出土の鉄石英（佐渡原産）製の細形管玉や、古墳時代の住居址出土の土器一式などは当地方唯一の資料として、極めて貴重な発見となりました。

今回の調査にご尽力いただいた顧問の先生方、調査団の方々、地元の皆さん、ならびに圃場整備にあたられた上小地方事務所の関係者の方々に衷心より感謝申し上げる次第であります。

昭和62年3月

上田市教育長 櫻井廣男

例　　言

1. 本書は、小泉地区県営開場整備事業の着工に先立ち記録保存を目的として、長野県上田市大字小泉字琵琶塚に所在する琵琶塚遺跡を対象に実施された緊急発掘調査の報告書である。現場における調査は、昭和61年7月22日から8月25日にわたり行われた。
2. 発掘調査は、上小地方事務所の依頼を受けて、上田市教育委員会が主体となり国庫補助事業として行った。現場調査は琵琶塚遺跡発掘調査団に事業委託して実施された。
3. 遺構実測は、塩入秀敏、塩崎幸夫、保坂富男、稻垣美麻、末永成清が行い、遺構写真は塩崎が担当した。また、遺物実測、拓本及びトレースは、原則として執筆者が行い、一部坂巻ケン子の協力を得た。遺物写真は、塩入、塩崎が撮影した。
4. 本書の遺構断面図中の水糸レベルは、原則としてA区においてはベンチマーク-20cm、B区においては同一80cmとし、例外は図中に記した。
5. 本書の執筆分担は凡そ次の通りであるが、第3章第2節については文末に執筆者名を記してある。

第1章	塩入秀敏
第2章	事務局
第3章 第1節	塩入秀敏
第2節	塩入秀敏・塩崎幸夫
第4章	塩入秀敏

6. 本書の編集は、調査団の協議に基づいて塩入、塩崎が行った。
7. 本調査に関わる遺物、実測図、写真などは全て上田市教育委員会が保管している。
8. 本書が上梓されるまでに、現場において、あるいは整理、執筆の段階において多くの方々、諸機関よりご指導、ご協力を頂いた。特に、森嶋稔氏を始めとする千曲川水系古代文化研究所所員の皆さん、長野県史刊行会の 笹沢浩氏、岡谷小学校青木一男氏からは種々ご助言を頂いた。また、東部町埋蔵文化財発掘調査団の皆さんからは暖かい励ましを頂戴した。上小地方事務所、地元工事委員会ほかの関係機関のご理解と積極的なご協力に対しても、合わせて感謝と敬意を表したい。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第1章 環 境

 第1節 自然的環境 1

 第2節 歴史的環境 1

第2章 調査に至る経過と調査の経緯

 第1節 調査に至る経過 4

 第2節 調査團編成 4

 第3節 調査日誌 5

第3章 調査の結果

 第1節 調査の概要 7

 第2節 造構と遺物 8

 1 住居址 8

 2 土 壤 37

 3 溝 址 39

 4 ピット 42

 5 包含層出土の遺物 43

第4章 ま と め 51

図 版 55

あとがき

挿 図 目 次

第1図	琵琶塚遺跡の位置	3
第2図	第1号住居址実測図	8
第3図	第1号住居址出土遺物実測図	9
第4図	第3号住居址・第5号土壙・第3号住居址カマド実測図	11
第5図	第3号住居址出土遺物実測図	12
第6図	第4号住居址カマド実測図	14
第7図	第4号住居址実測図	15
第8図	第4号住居址遺物分布図	17
第9図	第4号住居址出土遺物実測図(1)	18
第10図	第4号住居址出土遺物実測図(2)	19
第11図	第4号住居址出土遺物実測図(3)	20
第12図	第4号住居址出土遺物実測図(4)	21
第13図	第5号住居址実測図	22
第14図	第5号住居址カマド実測図	22
第15図	第5号住居址出土遺物実測図	23
第16図	第6号住居址実測図	24
第17図	第6号住居址出土遺物実測図	24
第18図	第8号住居址・第3号溝址実測図	25
第19図	第9号住居址実測図	25
第20図	第9号住居址出土遺物実測図	26
第21図	第11号住居址実測図	26
第22図	第11号住居址出土遺物実測図	26
第23図	第12号住居址・同址カマド実測図	27
第24図	第12号住居址出土遺物実測図	28
第25図	第13号住居址実測図	29
第26図	第13号住居址出土遺物実測図	29
第27図	第15号住居址実測図	30
第28図	第15号住居址出土遺物実測図(1)	31
第29図	第15号住居址出土遺物実測図(2)	32
第30図	第16号住居址実測図	34
第31図	第16号住居址出土遺物実測図	34

第32図	第18号住居址実測図	35
第33図	第18号住居址出土遺物実測図	35
第34図	第19・20号住居址・第6号土壤実測図	36
第35図	第19・20号住居址出土遺物実測図	36
第36図	第2~4・7~14号土壤実測図	37
第37図	土壤出土遺物実測図	38
第38図	第1号溝址実測図	39
第39図	第2号溝址実測図	40
第40図	第2号溝址出土遺物実測図	41
第41図	ピット出土遺物実測図	42
第42図	包含層出土遺物実測図(1)	44
第43図	包含層出土遺物実測図(2)	45
第44図	琵琶塚遺跡A区遺構全測図	47
第45図	琵琶塚遺跡B区遺構全測図	49

図版目次

図版1	琵琶塚遺跡遠景・琵琶塚遺跡A区全景	57
図版2	琵琶塚遺跡遠景・琵琶塚遺跡B区全景	58
図版3	第1号住居址・同址遺物出土状況・同址出土遺物	59
図版4	第3号住居址・同址カマド・同址出土遺物	60
図版5	第4号住居址・同址カマド・同址遺物出土状況	61
図版6	第4号住居址出土遺物	62
図版7	第4号住居址出土遺物・第5号住居址・同址カマド・同址出土遺物	63
図版8	第6号住居址・同址出土遺物・第8・9号住居址	64
図版9	第11・12号住居址・第12号住居址出土遺物	65
図版10	第13号住居址・同址出土遺物・第15号住居址	66
図版11	第15号住居址出土遺物・同址出土遺物	67
図版12	第16・18・19号住居址	68
図版13	第20号住居址・第19・20号住居址出土遺物・第12号土壤	69
図版14	土壤出土遺物・第13号土壤・第2号溝址	70
図版15	包含層出土遺物	71
図版16	包含層出土遺物・琵琶塚遺跡発掘調査図	72

第1章 環 境

第1節 自然的環境

長野県東部に位置する上田盆地の南西部は、塩田平と川西地区に二分される。この内、浦野川の形成した谷平野と室賀谷を中心とする一帯を川西地区と呼んでいる。浦野川は、上田小県地方では依田川・神川に次ぐ大河川で、小県郡青木村の大明神岳(1232m)、二ツ石岳(1563m)、御鷹山(1623m)、大沢山(1440m)、子檀嶺岳(1223m)などを源とする相染川、宮瀬川、滝川、田沢川、阿鳥川などを集め東北流し、下流域に至って更に室賀川、産川を合流して上田市下之条で千曲川に注ぐ。上流域の青木村沓掛あたりですでに谷平野を形成し始め、その幅は青木小学校辺で約400m、上田市浦野で約900m、同吉田で約1000mをはかる。また、河岸段丘もよく発達し、中下流域では2段を認めることができる。

今回圃場整備事業に先立って発掘調査された琵琶塚遺跡は、浦野川が形成した谷平野の最も幅の広い地帯である上田市大字小泉の字琵琶塚と字町裏にわたって所在し、浦野川右岸第2段丘の段丘崖に近く浦野川の流れに臨む地点に立地する。一帯は谷平野とは言っても東から西へ、また南から北へゆるやかな傾斜をなし、遺跡付近では川は北側の城山(933m)の山裾に寄って流下しているので、遺跡は谷平野の北端に位置することになる。浦野川を挟んで北には名勝岩鼻から三ツ頭山(約920m)につななる城山の山塊が屹立して北風をさえぎり、また南には塩田平と画する丘陵状の小尾根が存在するのみで日向小泉の名の示す通り日照まことに良く温暖で、その上、全国でも有数の寡雨地帯で浦野川以外に洪水を惹起するような河川もなく、さしたる自然災害は考えにくい絶好の生活環境であると言える。

琵琶塚遺跡は、この緩斜面に約40000m²にわたって広がり、海拔445~448mをはかり、また、浦野川の現河床とは4~5mの比高差をはかる。

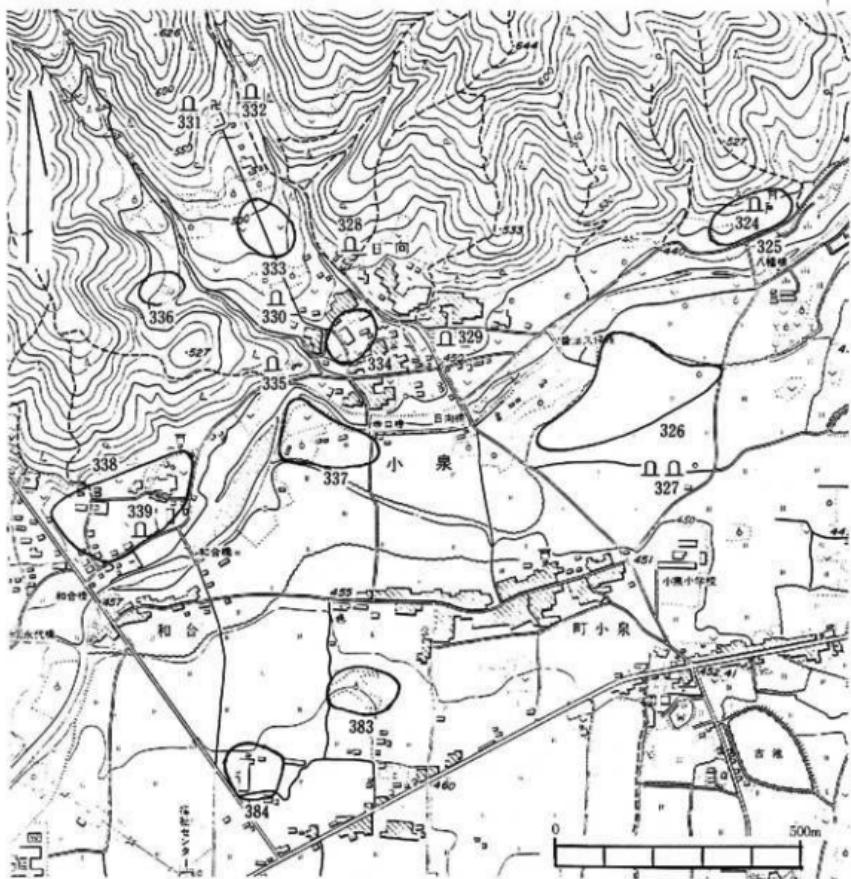
第2節 歴史的環境

浦野川流域で人類の足跡が認められる最も古いのは、約7000年前の縄文時代早期後葉茅山式期の土器を出土した室賀谷の奥の谷鬼(やぎ)遺跡である。地形などからより古い時期の遺跡が発見される可能性はあるが、現在の時点ではこれを遡る時期の遺跡は確認されていない。縄文時代はその後の全期を通して遺跡が存在するが、中期後半に遺跡数が最も増加する傾向が見られる。後晩期は数的には激減するものの、琵琶塚遺跡西南西3kmの大字浦野に下前冲遺跡が出現し、昭和55年に行われた発掘調査の結果、後期後葉加曾利B式期~晩期中葉大洞C式期の遺物が出土し、上田市内でも数少ない該期遺跡の内で最も優秀な遺物を出土した遺跡として知られている。

弥生時代の遺跡としては、青木村をも含め10を僅かに上回る数の遺跡をあげることができるだけで、それも後期後葉箱清水式期の小遺跡ばかりである。その中で今回の琵琶塚遺跡は、調査区域の制限もあって典型的な該期の遺構は少なかったが、遺物はかなりの量で検出されており、大規模な集落遺跡の存在が予想されている。終末期～古墳時代初頭の遺跡としては、青木村の岡石遺跡B地点と琵琶塚遺跡がある。両遺跡とも東海地方西部に中心を持つS字口縁台付彫形土器を出土しており、琵琶塚遺跡はその他に近畿地方や北陸地方の影響を受けた土器を持つ。

古墳時代の遺跡は古墳の数に比して少数である。湮滅したものも含め19基を数える古墳の内、室賀の神宮寺古墳、青木村村松の塚穴古墳が調査された。共に両袖型の横穴式石室を持つが、前者は直線的な羽子板型石室を、後者は胴張りの石室を有する。特に後者の副葬品は勾玉・切子玉・ガラス小玉・耳環などの装身具が見事である。また、西方1kmの和合将軍塚古墳は礎樋をもつ竪穴式石室墳と想像され、かつて鉄剣2口が出土したと伝える。西北500mの日向小泉には日向小泉1～5号の5基の円墳が存在し、当地区唯一の群集墳として注目される。更に、すでに畠化して湮滅してはいたが最近人物埴輪・円筒埴輪を出土した八幡山古墳は、琵琶塚遺跡とは浦野川を挟んで東北方300mの位置にある。これらの古墳は、やや古いと考えられる和合将軍塚古墳は例外として、他の殆どは後期後葉～終末期に比定され、7世紀代に築造されたものである。和合将軍塚古墳が竪穴式石室墳としてそのまま認められるならば、6世紀前葉以前にはすでにかなりの権力の集中があり、その後は少々分散するものの継続して権力の存在をみることができると考えられる。吉田の地名は古代吉田連氏にかかるもので、吉田連氏を中心とした一帯の開発を想定する考えもなされている。このように、古墳の存在は当時の開発が相当進んでいたことを物語っており、今後この時期の遺跡が更に増加することを示唆していると言えよう。

奈良・平安時代に至ると、集落数が急増する。技術の進歩により灌漑用水路の開鑿や水田の開発が急激に進んだ結果であり、水田化可能な谷平野はおろか戦後開拓の手が入った室賀谷の奥の谷鬼の地にも1000年前にすでに開拓者が入り込んでいる。8世紀中頃には上田に信濃国府及び信濃国分寺が置かれ、東山道も保福寺越えて浦野川沿いに通っており、青木村当郷の岡石遺跡は「浦野駅跡推定地」として発掘調査された。東山道は当地区内は浦野川左岸山麓と考えられており、やや下流で浦野川を渡り、古舟橋辺で千曲川を渡って東に向かったと想定されている。また『万葉集』の「浦野の山」もこの地とされる。信濃16の官牧の内の一つ塙原牧もあって、牧に関する数多くの地名等はその事実を如実に物語る。『日本書紀』に登場する「跡目郷」の「他田舍人蛭夷」は、信濃国造氏に繋がるものと考えられるが、塙穴古墳や塙原牧とも何らかの関係があったと考えることもできよう。当地区は『倭名類聚抄』の小県八郷の内の「福田郷」であり、一部分「跡部郷」にも含まれると思われるが、今ならば超一級国道とでも言うべき東山道沿いで中央の文物も入りやすく、当時としては開けた土地であったと考えられる。古代末に比定されている小泉地区的条里的遺構は、今に残されているその名残の一つであると言えよう。



第1図 琵琶塚遺跡の位置

- | | |
|-------------------|------------------|
| 324 八幡山古墳（古墳） | 333 西寺畠遺跡（縄文～平安） |
| 325 八幡山遺跡（平安） | 334 旗鉢遺跡（縄文～平安） |
| ◎326 琵琶塚遺跡（弥生～平安） | 335 錬治山古墳（古墳） |
| 327 琵琶塚古墳（古墳） | 336 錬治山遺跡（弥生） |
| 328 日向小泉1号古墳（古墳） | 337 大道下遺跡（弥生） |
| 329 日向小泉2号古墳（古墳） | 338 和合遺跡（縄文～平安） |
| 330 日向小泉3号古墳（古墳） | 339 将軍塚古墳（古墳） |
| 331 日向小泉4号古墳（古墳） | 383 高田遺跡（古墳・平安） |
| 332 日向小泉5号古墳（古墳） | 384 長谷田遺跡（弥生） |

第2章 調査に至る経過と調査の経緯

第1節 調査に至る経過

昭和61年度、小泉地区県営圃場整備事業が計画され、その事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である琵琶塚遺跡が存在していた。このため、工事主体者である上小地方事務所と長野県教育委員会、上田市教育委員会の関係者で事前に保護協議を行い、工事施行前の緊急発掘調査を実施、記録保存を図ることに決定した。

7月18日、地元の小泉区民会館において琵琶塚遺跡発掘調査打ち合わせ会議が開かれ、発掘調査の内容や調査時期、調査協力者の依頼等について打ち合わせが行われた。

7月22日、現地において調査団会議をもち、調査地点、調査方法等について打ち合わせを行い、同日さっそく重機による試掘を始めた。その後、7月25日、発掘器材搬入、テントの設営を行い、7月28日、鍬入れ式が行われ、本格的な調査が開始された。

第2節 調査団の編成

上田市教育委員会は上田市文化財調査委員会の答申に基づいて、新たに琵琶塚遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査を同調査団に事業委託して調査を実施した。

調査団の構成は次のとおりである。

琵琶塚遺跡発掘調査団名簿

顧 問	箱山貴太郎（上田市文化財調査委員会委員長）
々	黒坂周平（上田市文化財調査委員会副委員長）
々	五十嵐幹雄（上田市文化財調査委員・日本考古学协会会员）
々	岩佐今朝人（上小考古学研究会会长・日本考古学协会会员）
团长兼調査主任	塙入秀敏（上田女子短期大学講師・日本考古学协会会员）
調 査 員	猪熊啓司（上田第一中学校教諭・上小考古学研究会会員）
々	児玉卓文（上田染谷丘高校教諭・日本考古学协会会员）
々	倉沢正幸（信濃国分寺資料館学芸員・長野県考古学会会員）
調査補助員	塙崎幸夫（長野県考古学会会員・駒沢大学卒業生）
々	翠川泰弘（長野県考古学会会員・国学院大学卒業生）
々	保坂富男（上小考古学研究会会員）
々	福垣美麻（奈良大学学生）

事務局長 小山 幸 (社会教育課長)
 事務局次長 内藤良典 (社会教育課文化係長)
 事務局員 倉沢正幸 (社会教育課文化係・昭和61年9月30日迄)
 　　中沢徳士 (社会教育課文化係・昭和61年10月1日より)
 調査協力者 赤羽三千男・井形健司・生田淳・石川邦子・唐沢藤幸・倉持恵利子・黒沢俊直・小泉節子・小泉忠一・小林弘道・小山富久恵・坂下毅・笹木正一・清水節子・神保覚・末永成清・竜野千恵・千明あゆみ・手塚繁・中田貴典・西川和恵・沼田龟治・古川浩美・堀内今朝次・峰田百合子・宮崎まつ子・村瀬知子・村瀬ヨミ子・小泉地区ほ場整備事業実行委員会

第3節 調査日誌

昭和61年

- 7月22日(火)【雨のち曇】圃場整備事業対象区域に含まれる遺跡範囲内の水田毎にTP01～TP25の試掘トレンチを設定、重機による試掘を行う。S字口縁台付甕など出土。
- 7月23日(水)【曇時々晴】重機によりTP24を拡張する。
- 7月25日(金)【晴】発掘器材搬入、テント設営を行う。TP22・23付近の表土を重機で剝ぐ。TP22にて数軒の住居址・土壤・ピットなどの存在を確認する。午後、グリッド設定作業。
- 7月26日(土)【晴】グリッド設定作業。グリッドE-8・9,F-8の遺構検出作業を行う。
- 7月28日(月)【晴】鍛入れ式。遺構検出作業。
- 7月29日(火)【晴のち雨】遺構検出作業。住居址・土壤・ピット等を検出。第4号住居址で竈煙道を検出する。
- 7月30日(水)【晴】遺構検出作業。グリッド拡張作業。E-5グリッドから転用硯出土。
- 7月31日(木)【晴】遺構検出作業。グリッド拡張作業。鍛冶場と思われる遺構を検出。川辺小学校考古学教室が調査に参加。
- 8月1日(金)【晴】遺構検出作業。第11・13号住居址掘り下げ。午後、造り方実測用の釘を打つ。
- 8月2日(土)【晴】第11・12・13・15号住居址・第1号溝址・第1号ピット掘り下げ。信濃国分寺資料館の考古学教室が現場研修に来る。
- 8月4日(月)【雨】遺物洗浄・整理、実測作業。
- 8月5日(火)【晴】第3・4・5・19号住居址掘り下げ作業。
- 8月6日(水)【晴】第1・3・4・5号住居址掘り下げ作業。

- 8月7日(木)【晴】 第1・15号住居址、第3号土壇、第2号溝址掘り下げ。セクション実測と写真撮影。
- 8月8日(金)【曇のち雨】 遺構掘り下げ、セクション実測、写真撮影。
- 8月9日(土)【晴】 遺構掘り下げ、セクション実測、写真撮影。
- 8月11日(月)【晴時々曇】 遺構掘り下げ、セクション実測、写真撮影。第5号住居址平板実測。
- 8月12日(火)【晴】 遺構掘り下げ、実測作業。
(13~15日 お盆休み)
- 8月16日(水)【晴】 午前中雨水の排水作業。遺構掘り下げ、セクション実測、写真撮影。
- 8月17日(木)【晴のち雲】 午前中雨水の排水作業。第15号住居址より多量の弥生土器とともに緑色のガラス小玉出土。午後現地説明会開催。
- 8月18日(金)【雨】 遺物洗浄・整理作業。
- 8月19日(土)【雨のち雲】 午前中雨水の排水作業。遺構掘り下げ、実測、写真撮影。第15号住居址より鉄石英製の細形管玉出土。
- 8月20日(日)【晴】 遺構実測作業。
- 8月21日(月)【晴】 遺構清掃作業。実測、写真撮影。
- 8月22日(火)【曇のち雨】 雨水排水作業。実測、写真撮影。
- 8月23日(水)【晴】 平板実測作業。
- 8月24日(木)【曇のち雨】 平板実測作業。
- 8月25日(金)【晴】 全体写真撮影用にローリングタワーを建て、全体写真撮影。テント・発掘器材の搬出。

現場での発掘調査は8月25日に終了し、以降、信濃国分寺資料館において出土遺物の整理、報告書の作成が行われた。昭和62年3月31日調査報告書が刊行され、発掘調査は全て終了した。

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

琵琶塚遺跡は、浦野川右岸の河岸段丘上に凡そ 40000m² にわたり弥生土器・土師器・須恵器などの遺物の散布が見られる埋蔵文化財包蔵地として知られていた。今回計画された一帯の圃場整備事業により、遺跡範囲の約 2/3 が工事対象区域内に含まれることになったので、予め発掘調査を行い記録保存を図ることにした。しかし、諸種の状況により広大な遺跡範囲の全面発掘は極めて困難なので、その内の特に遺構・遺物の集中している地点を選定して調査することに決定した。

そこで、調査地点選定のため、工事区域内に含まれる遺跡範囲の全域にわたって、水田一筆毎に重機(バックホウ)による長さ数mから数十mのトレンチTP01～TP25を掘り、遺構の存在・遺物の出土状況について調査した。その結果、河岸段丘崖に沿うように TP22～25 の 4 トレンチにおいて特に濃密に遺物の出上がり、また遺構と思われる黒色の落ち込みが何ヶ所も確認された。それらの結果に基づいて、調査地点は TP22・23・24・25を中心とした約 500m²、調査はグリッドによる平面発掘とし、重機により表土を剥ぎ取りグリッドを設定した。グリッドは 3m × 3m とし西から東に A・B・C……、南から北に 1・2・3……とした。また、水田の畦畔により調査区域を同一面にできないため、西側半分を A 区、東側半分を B 区とした。

調査地点の基本的層序は、表土(耕作土・約 15cm)——溶脱層(3 ~ 5cm)——黒色土層(遺物包含層・7 ~ 10cm)——黄色粘土層であり、B 区においては黒色土層がやや薄く、流れ込みと思われる礫群が一面に広がっている箇所もあった。

調査の結果、A 区においては第 1 ~ 9 号住居址(SB01~09)、いくつもの土壤(SK)が検出された。ただし、第 2・7・9 号住居址(SB02・07・09)は平面プランが明確でなく、第 8 号住居址(SB08)はコーナーの一部が調査区域に僅かにかかるだけのものであり、遺物の出土もなく内容の不明確なものである。これに対して第 4 号住居址(SB04)は特に遺物が豊富で今回の調査結果を代表するものの一つとなった。B 区では、第 11 ~ 20 号住居址(SB11~20)と第 1・2 号溝址(SD01・02)および土壤(SK)・ピット(P)がいくつか検出された。これらの内、第 15 号住居址(SB15)は全容を明らかにしえなかったが、そのもつ遺物から弥生時代から古墳時代にかけての端境期に位置するものと考えられ、特に東海西部・畿内・北陸の影響を受けた土器を多くもっている点で注目された。

このように、決して広い面積の調査ではなかったが、多くの遺構の検出・遺物の出土があり、特に当地方の考古学的研究の上で欠けている部分を補う成果も得ることができた。

第2節 遺構と遺物

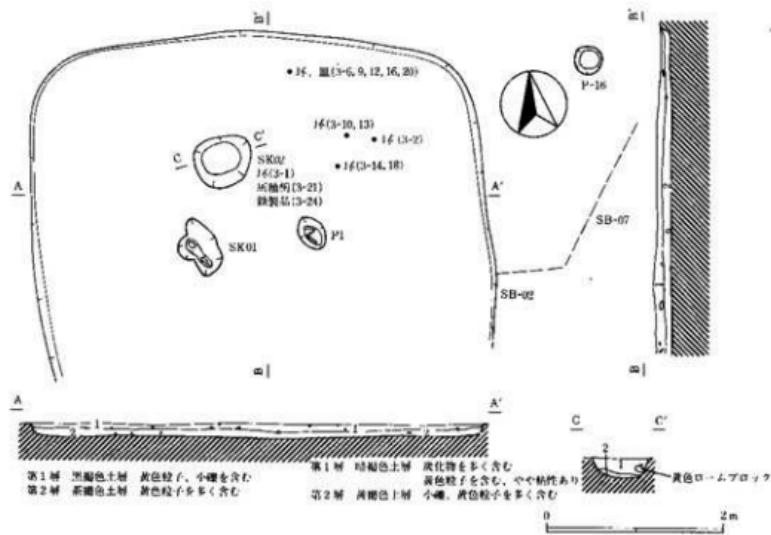
1. 住居址

(1) 第1号住居址 (SB01)

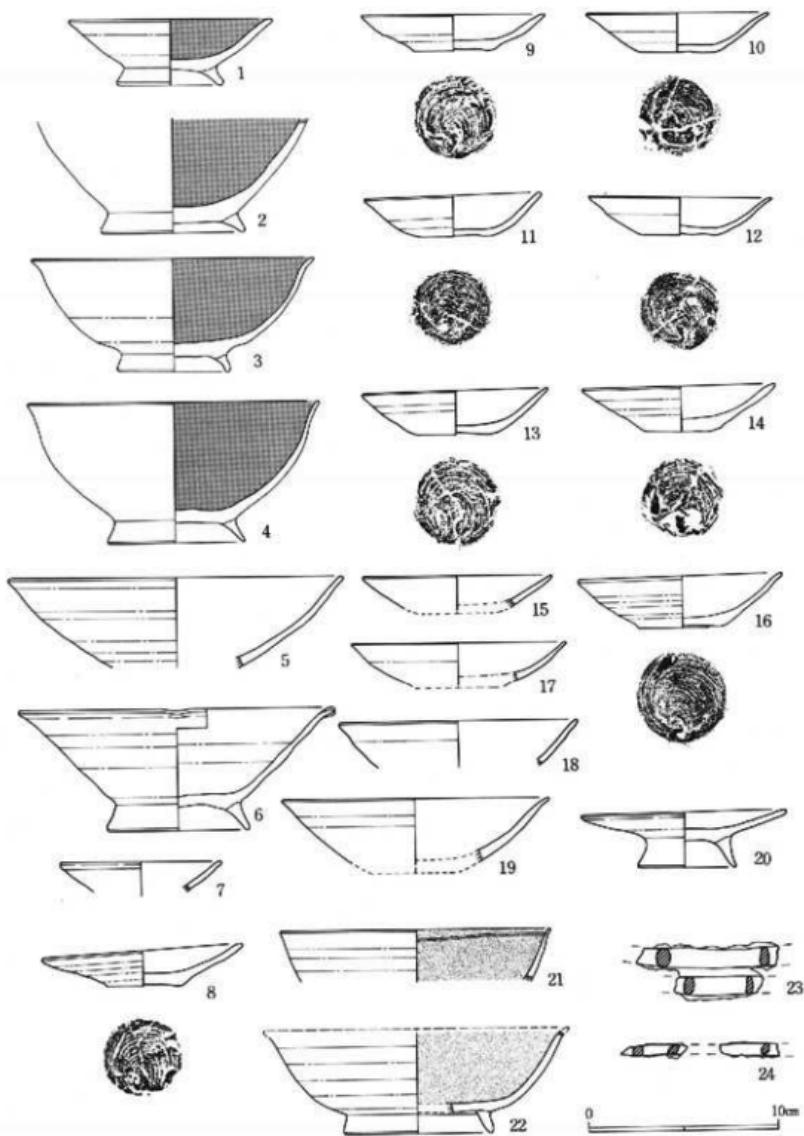
遺構 (第2図)

本住居址は試掘調査の際に第24号トレーニチに於いて確認され、A区の表土排除後のグリッド設定によりE・F列の5・6に位置する事になったが、遺構が黒褐色土の包含層中に構築されていた為、プラン確認は難しく特に南側のグリッド5列付近では度重なる精査にも拘わらず全く判別出来ない状態であった。そこでやむを得ず十文字に土層ベルトを残して4分割し、土層セクションと検出した床面から住居址プランを把握しようとした。しかし、住居址南側の立ち上りは土層セクションでは観察出来ず床面も他の遺構との重複に因り追求が不可能となり、調査期間等の事情から途中で調査を打ち切らざるを得なかった。

以上の経過から本址は南部が未調査であるが、プランは北壁の5.3mを一辺とする隅丸(長)方形を呈するものと思われる。東西を主軸とした時の主軸方向はN-5°-Eである。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの壁高は12~20cmを測る。床面はほぼ平坦で全体に軟弱であった。覆土



第2図 第1号住居址実測図



第3図 第1号住居址出土遺物実測図

は2層に分けられ上層は小礫と僅かに黄色粒子を含んだ黒褐色土で、下層は黄色粒子を多量に含んだ茶褐色土である。土壤・ピットは3基検出され、SK01は70×45cm、深さ14cm、SK02は65×60cm、深さ15cm、P1は42×30cm、深さ21cmの規模であった。カマド、周溝等は検出されなかつた。本址の所産期は出土遺物から平安時代後期と推定される。

遺物（第3図）

本址からは土師器、土師質土器、灰釉陶器、鉄製品が出土している。遺物の出土は住居址北東部に多く、土師器、土師質土器は幾つかのまとまりを持って出土した。また、SK02内より1・21・24の上師器、灰釉陶器、鉄製品が出土している。1～6は土師器の高台付环で、1～4は内面が黒色研磨されている。1・2はやや厚手で外側へしっかりと張出した高台を持ち底部裏面は全面に指頭によるナデが行われている。3・4は丸味を持った体部が口縁部で外反し、高台は外側へ張出しながらも端部で僅かに内湾する。底部裏面は微かに糸切痕を残している。1・2に比べ内外面の調整が丁寧で高台部の作り等から明らかに灰釉陶器を模倣したものと推察される。5・6は口縁端部で外反する器形を持つ环であるが、6の口縁部には指頭に依る押圧が加えられており、これは灰釉陶器の輪花の模倣であろうと推察される。7～19は土師質土器の环である。何れも内湾する体部と僅かに外反した口縁部を持ち、7の口縁部のみは外側へ肥厚し玉縁状を呈する。底部は右回転の糸切痕が明瞭に残る。法量は最少の7から土師器に近い16・19までややばらつきが認められるが、9～12、13～15は殆ど共通の値を示す。20は土師質土器の足高高台付皿である。21・22は灰釉陶器の碗で、21は口縁内側に1条の沈線を持ち、内面のみ淡く白色に施釉されている。22は内面のみ全面に淡緑色の施釉が施されている。ともに10世紀後半から11世紀頃の東濃系諸窯の製品と思われる。23・24は鉄製品である。共に製品の用途は不明であるが、23は断面梢円形の棒状の製品が2本接着した物と思われる。24は断面が長方形から次第に菱形に薄くなり、先端は斜めに作られている。

（塙崎）

（2）第2号住居址（SB02、第44図）

本住居址はグリッドG-5・6に於いて第1・7号住居址と重複して住居址の北壁と東壁のプランの一部が検出された。しかし、黒褐色の包含層中に構築されていた為、プラン検出は困難で諸般の事情から調査には至らなかった。

（塙崎）

（3）第3号住居址（SB03）

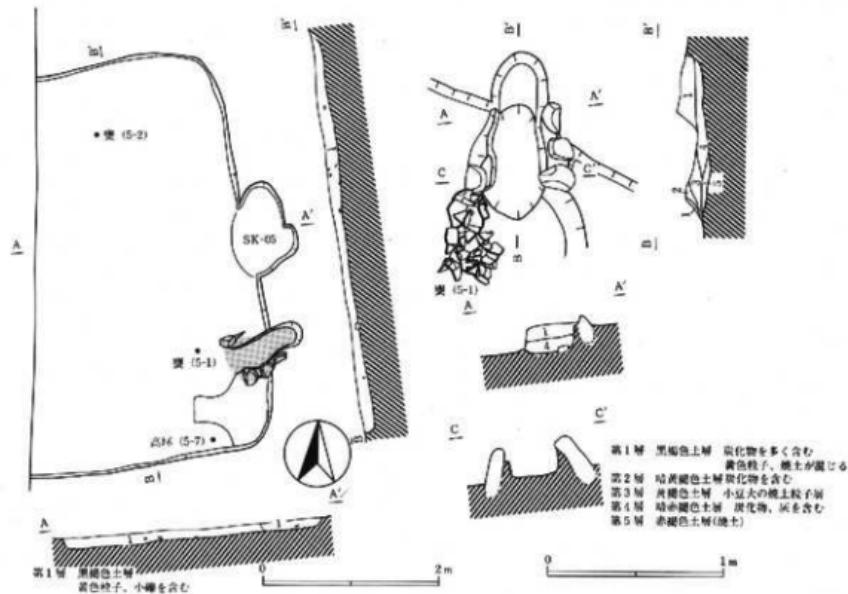
遺構（第4図）

本住居址はA区南西部のグリッドD-5～7より検出された。西側は調査区域外に在り未調査だが、プランは主軸方向をN-12°-Wに持ち長軸4.7mの隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は5～15cmを測り、壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面は僅かに南に傾斜しているものほぼ平坦で、全体に軟弱であった。ただ、カマド右手にあたる住居址南東隅部は焼土混じりの黄褐色

粘土により7cm程高く作られ、非常に堅緻であった。覆土は小礫と黄色粒子を含んだ黒褐色土の単一層で粘性は乏しかった。カマドは東壁南寄りに北側に約30度傾いて設置されており、片袖3個の河原石を芯に用い粘土で構築されていたものと思われるが左袖の2個と天井石は抜かれていた。残存部の規模は煙道部から袖末端まで97cm、両袖の幅65cmを測る。燃焼部内部は5層に分けられ、焼土や小豆大の焼土粒子が堆積していた。柱穴、周溝等は検出されなかった。本址は東壁中央部を第5号土壙(SK05)に切られており、住居址形態、出土遺物から古墳時代後期前半の所産と推定される。

遺物(第5図)

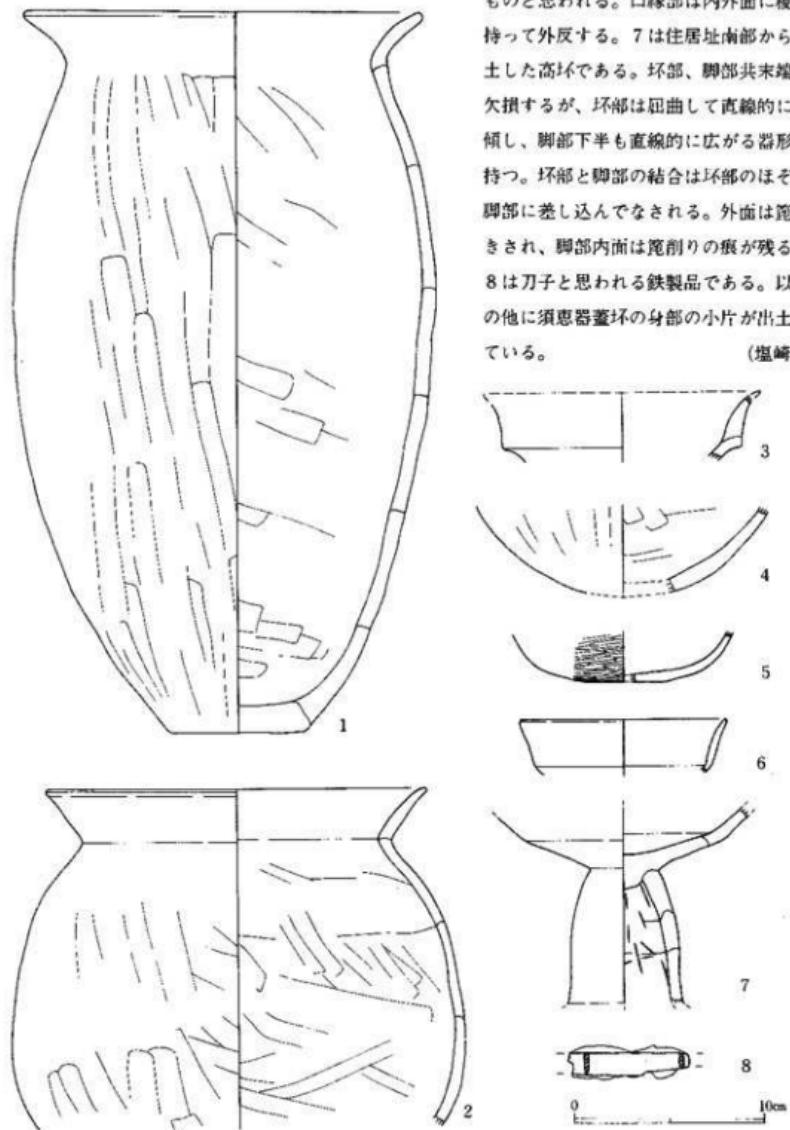
本址からは土師器、須恵器、鉄製品が出土している。1はカマド左手前部より西向きに倒れた状態で出土した長胴甕で器高38.4cmを測る。最大径は胴部中央に有り滑らかに張った胴部と緩くくの字状に外反する口縁部を持つ。外面は継位、内面は横位の窓削りが行われた後、内面はナデ整形される。また、口縁部は横ナデされる。2は住居址北部より出土した球形胴の甕である。やや下服れの胴部に強く屈曲して外反する口縁部を持ち、外面は継位、内面は横、斜位の窓削りがされ、口縁部は横ナデされる。3は甕の口縁部で有段口縁を呈する。4は丸底の甕底部で、内外面窓削りが行われている。5は窓磨きされた丸底の甕である。6は須恵器の环を模倣したいわゆ



第4図 第3号住居址・第5号土壙・第3号住居址カマド実測図

る模倣壺で、緩やかな丸底の底部を持つものと思われる。口縁部は内外面に稜を持って外反する。7は住居址南部から出土した高壺である。壺部、脚部共末端を欠損するが、壺部は屈曲して直線的に外傾し、脚部下半も直線的に広がる器形を持つ。壺部と脚部の結合は壺部のほどを脚部に差し込んでなされる。外面は範磨きされ、脚部内面は範削りの痕が残る。8は刀子と思われる鉄製品である。以上の他に須恵器壺壺の身部の小片が出土している。

(塩崎)



第5図 第3号住居址出土遺物実測図

(4) 第4号住居址 (SB04)

遺構 (第6、7図)

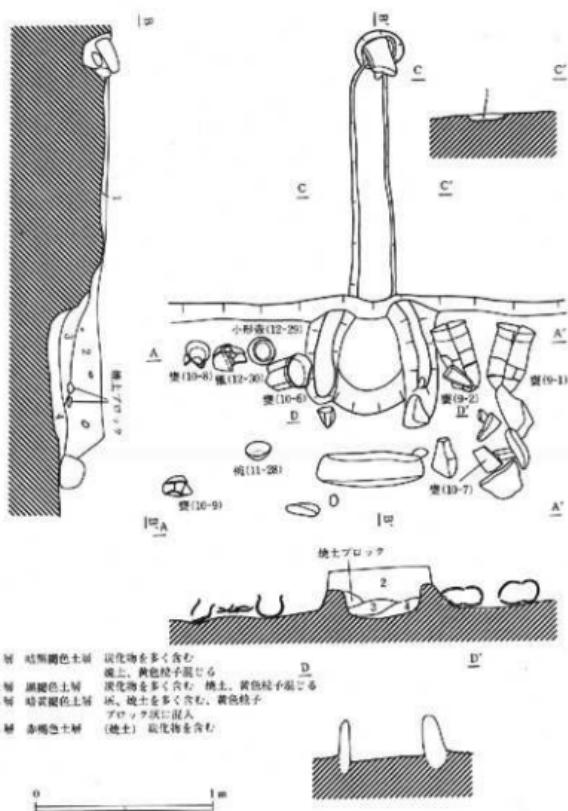
本住居址はA区西部のグリッドC~E列の8~10に股がって第5号住居址(SB05)と重複して検出された。南東部を第5号住居址に、中央部と西部を暗渠に因って切られている。西側は調査区域外の為未調査であるが、プランは主軸方向をN-2°-Wとほぼ南北に持ち、一辺7.2mの隅丸方形を呈すると推測される。残存する壁高は21~35cmを測り、壁は緩やかに立上がり上方ではほぼ垂直となる。床面はほぼ平坦であるが、黒褐色土の包含層中に構築されていた為全体に軟弱であった。覆土は3層に分けられ、第1層は黄色粒子を多く含んだ黒褐色土、第2層は黄色粒子、炭化物、小礫を含んだ茶褐色土、第3層は粘性の強い暗褐色土である。なお、住居址北部の第2層中には小児頭大の礫が多数含まれていた。カマドは北壁のほぼ中央部に設けられており、煙道突出部から袖末端まで230cm、両袖の幅75cmの規模を有する。遺存状況は良好で、構築に際しては床面を浅く掘り進めた後黒褐色粘土で馬蹄形に袖を作り、両袖先端に補強の河原石を配している。煙道部は舟底状に掘られ、先端部はピット状にやや深く掘られ拳大の石が詰まっていた。カマド正面には61×21×15cmを測るカマボコ形の砂岩が据えられていた。また、カマド右手前には十数個の河原石が固まって検出されたが性格等は不明である。柱穴は北東部で1基検出され、60×52cm、深さ20cmを測る。本址の所産期は住居址形態、出土遺物等から古墳時代後期後半と推定されるが、覆土内より古墳時代前期前半に比定される土師器片が多量に出土しており、該期の住居址を破壊して構築され、本址廃絶後に再び覆土内に流込んだ可能性が想起される。

遺物 (第9~12図)

本址からは古墳時代後期後半に比定される土師器と石製品の他に、前述した様に古墳時代前期前半に比定される土師器片が覆土の上層、下層を問わず多量に出土している。また、明らかに流込みと思われる弥生土器片、平安期の須恵器片等も上層より若干出土している。ここでは古墳時代後期の遺物に就いて概述し、他時期の遺物は本節5包含層出土の遺物で触れる事とする。

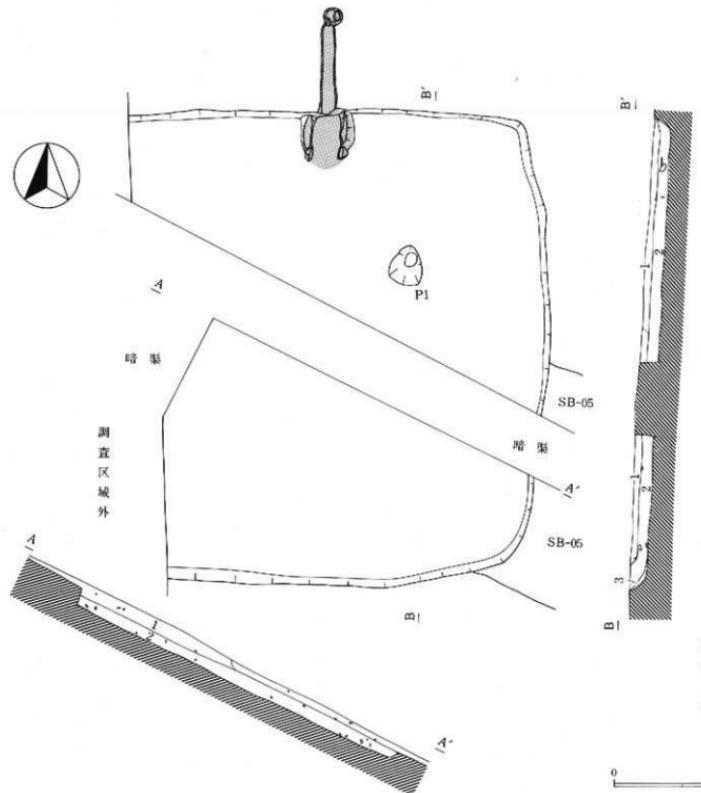
本址は中央部を暗渠に切られていたものの遺存状況は良好で、カマド周辺を中心に住居址機能時の土器の多くが原位置を留めて出土した(第6・8図)。1・2はカマド右側に並べて横置されていた長胴甕で、1は僅かに下腹の筒状の胴部に強く外反する口縁部を持ち、底部は平底で木葉痕が残る。2は段を持って緩く外傾する口縁部と丸底の底部に向かって滑らかに収縮する砲弾状の胴部を持つ。共に小砂粒、金雲母等を多量に含んだ砂質の胎土で、内外面範削りの後、ナデ整形される。また、胴部上半の外面には暗黄灰色の付着物が泥状に付着している。3~5はやや小形の甕で4・5は口縁部の形状から甕の可能性もある。6はカマド左脇に倒れかかった状態で出土した長胴甕で1・2より大形で堅敏に焼かれた土器である。胴部下半を欠損しているが出土状態から推して現状のままカマド脇に立てて使用されていたものと思われる。7はカマド右手前にまとまって検出された河原石の中より出土した長胴甕の胴下半部で、胎土、調整は1・2と同

様のものである。8～12は小形の甕で8・9はカマド左部より床着で出土した。何れも内外面窓削りされ、内面と口縁部はナデ整形されている。13～17は底部で13・14は長削甕の底部である。18・19は住居址北東部で並んで出土した壺と胴張甕で18は球形の胴部に直立て外反する口縁部を持ち、口縁端部は面取りされ上下に肥厚している。胴部内外面は横位、口縁部は縦位の窓磨きが施され、口縁部は横ナデされる。19は下腹れの大きく張った胴部と緩く外反する口縁部を持ち、内外面に横位の窓磨きが施される。共に、二次焼成を受けている。20は壺でやや内傾する口縁部と



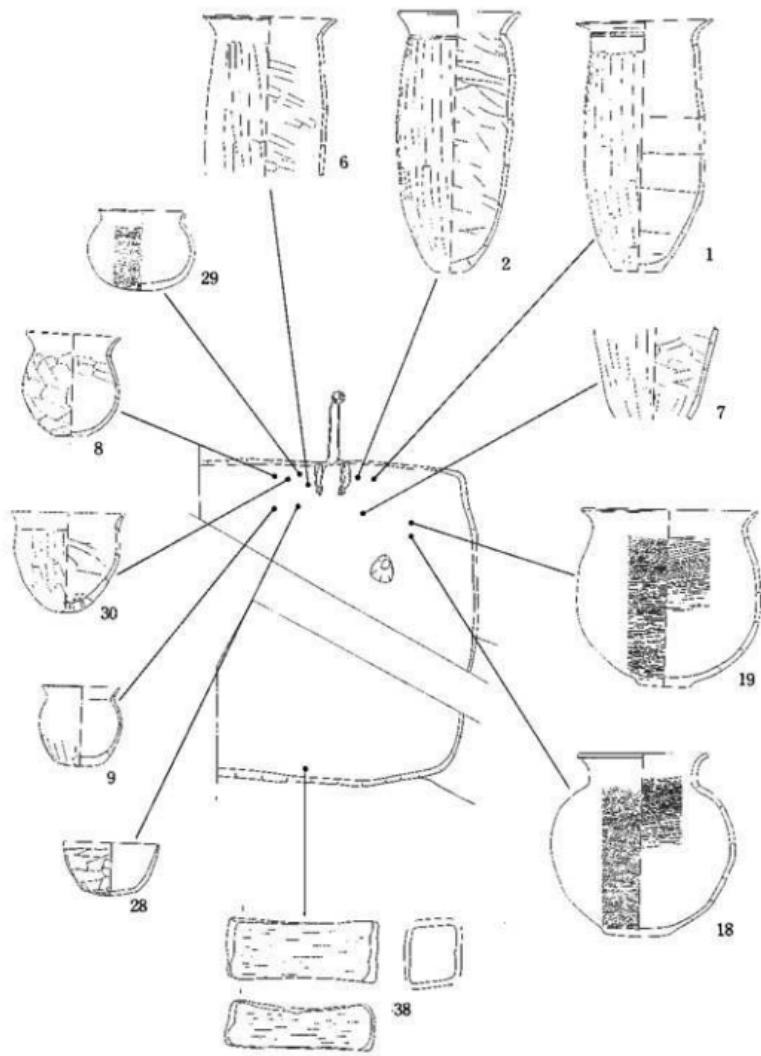
第6図 第4号住居址カマド実測図

丸底を持ち、須恵器を模倣したものと推察される。21～27は壺で何れも内湾する口縁部と偏平な丸底を持ち、25～27は内面が黒色研磨されている。28はカマド左部より出土した壺で、やや丸味を持った平底から僅かに内湾しつつ直線的に立上がる器形を持つ。内面は黒色研磨され、外面と底部裏面は窓削りが施されている。29はカマド左脇より完形で出土した小形壺で偏球形の体部に短く直立して端部で外反する口縁部を持つ。内面は黒色研磨され、外面は横位の窓磨きが施される。30は29の左横から圧碎されて出土した壺で筒弾状の体部に僅かに外反した口縁部を持ち、底部には不規則に18孔が穿たれている。内外面共窓削りが行われている。31～35は須恵器壺を模倣したいわゆる模倣壺である。総べて浅い丸底に外反する口縁部を持つが、稜を持って緩やかに外

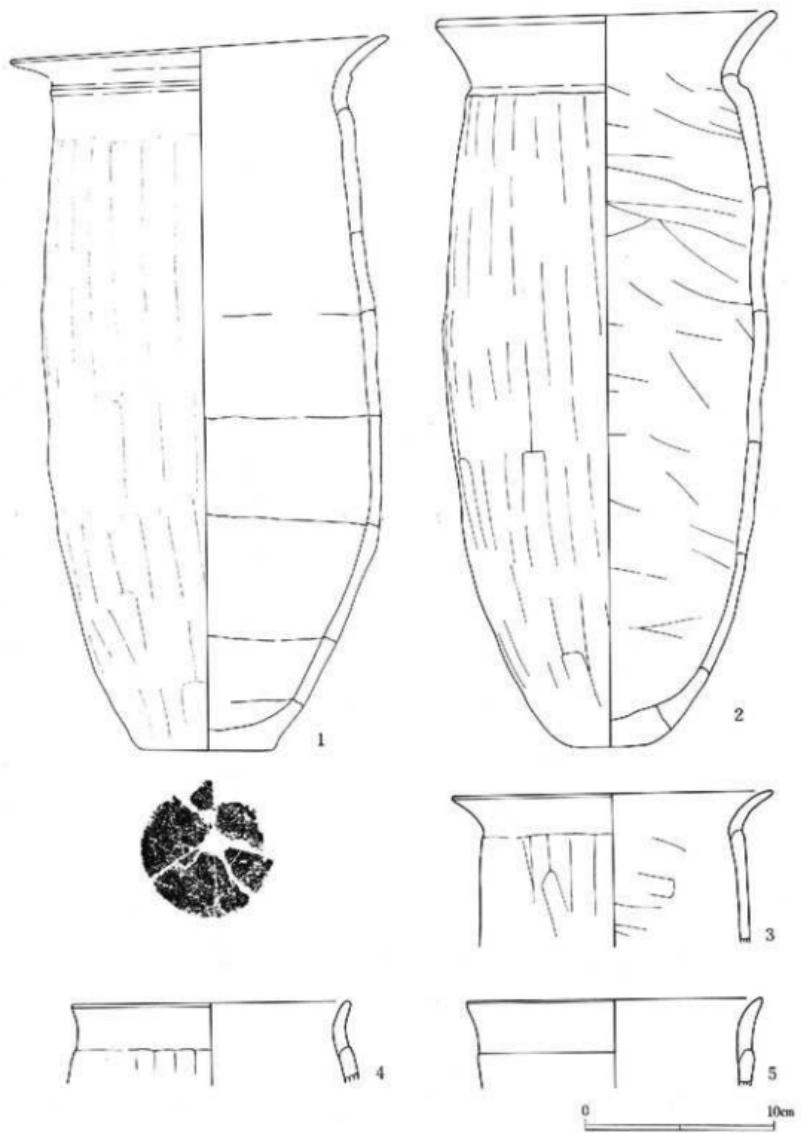


第1層 黒褐色土層 黄色粒子を多く含む
第2層 茶褐色土層 黄色粒子、炭化物、
小礫を含む
第3層 暗褐色土層 粘性が強い

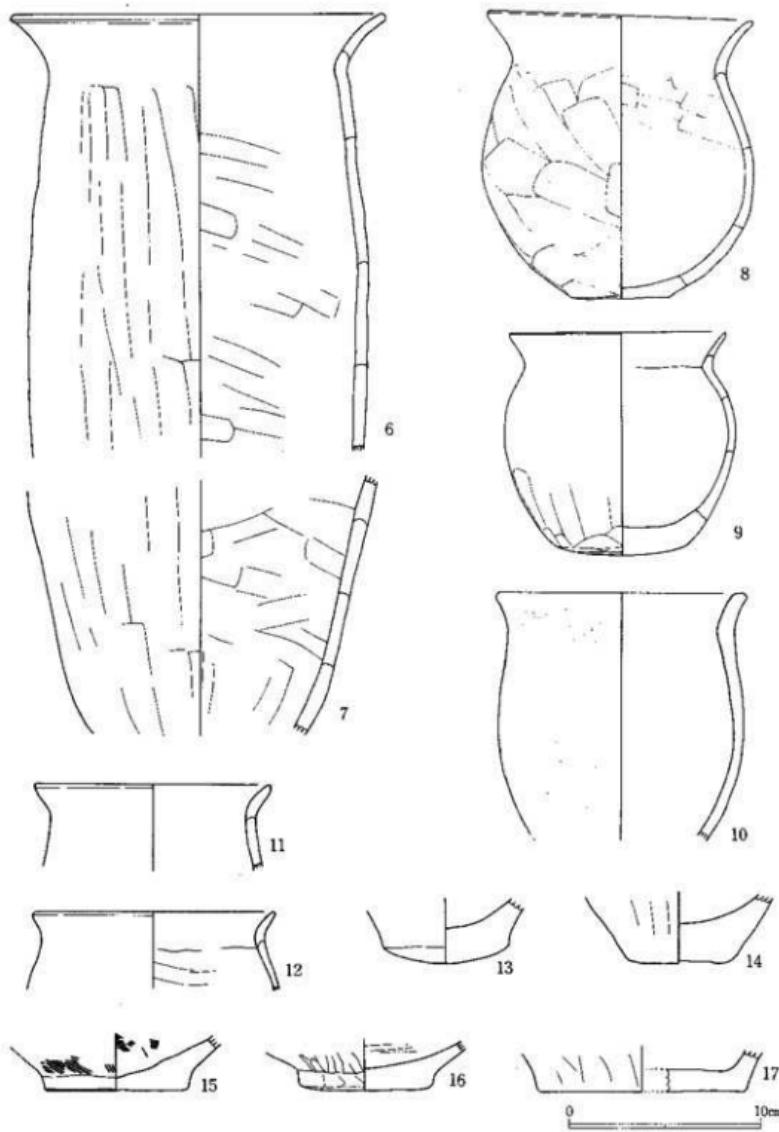
第7図 第4号住居址実測図



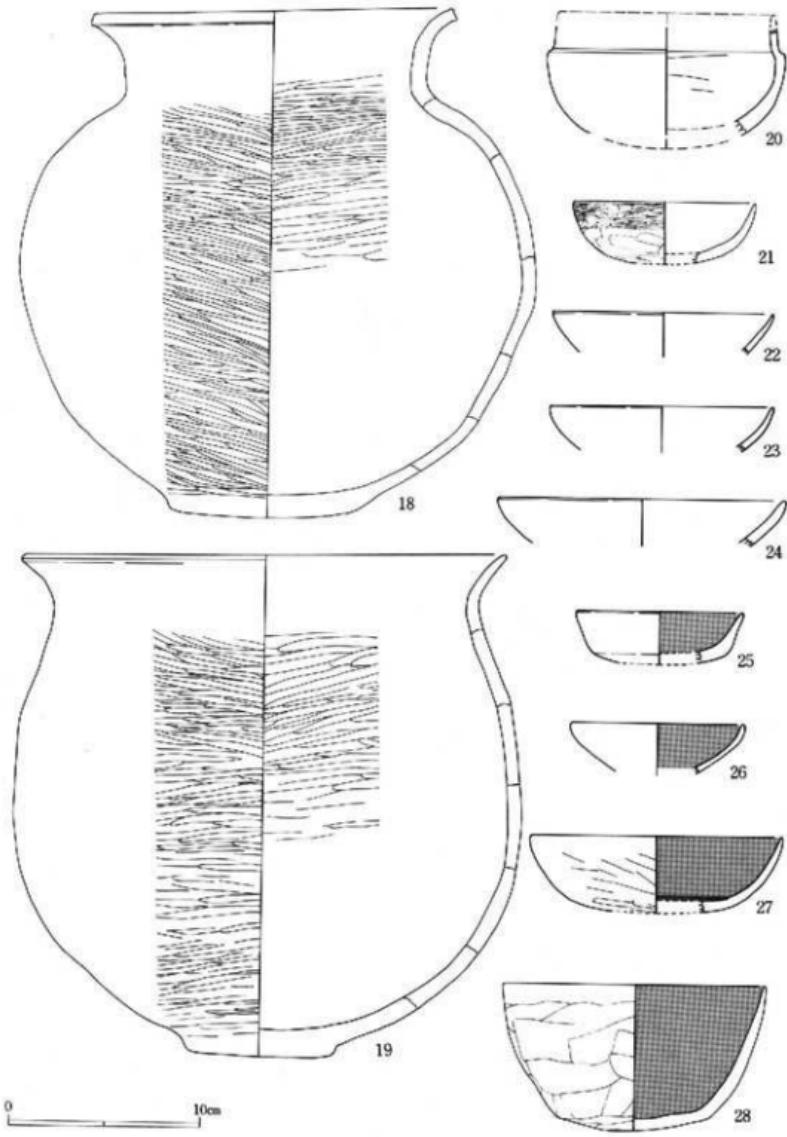
第8図 第4号住居址遺物分布図



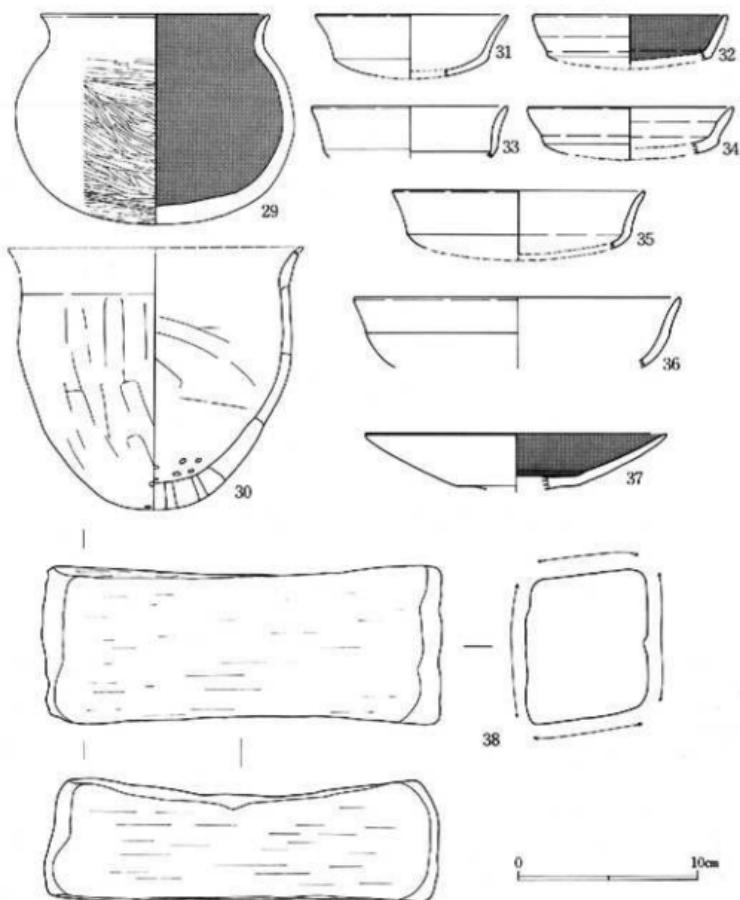
第9図 第4分住居址出土遺物実測図(1)



第10图 第4号住居址出土遗物实测图(2)



第11図 第4号住居址出土遺物実測図 (3)

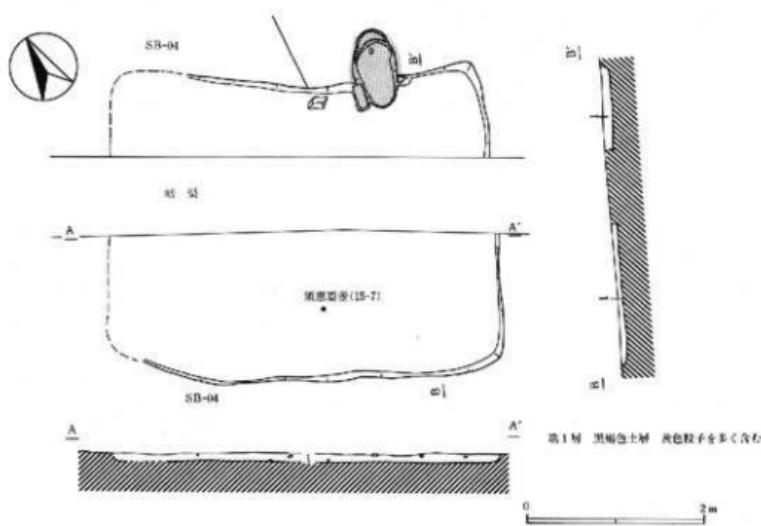


第12図 第4号住居址出土遺物実測図

反する類 (31・33・35) と、一旦直立してから直線的に外傾する類 (32・34) の2形態に分類可能である。36は偏平で大形の环である。37は内面黒色研磨された高環環部で直線的に大きく開く器形を持つ。38は南壁沿いから出土した砂岩製の砥石で $227 \times 91 \times 70\text{mm}$ の大きさを有し重量は 2130g を測る。4面が平滑に使用されている。以上の他に覆土内から 25g の鉄滓が 1 点出土している。

(塙崎)

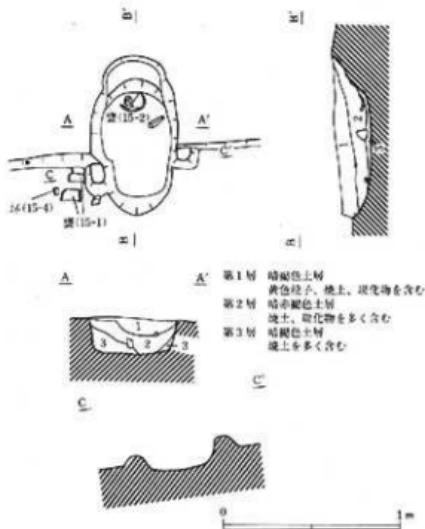
(5) 第5号住居址 (SB05)



第13図 第5号住居址実測図

造構(第13、14図)

本住居址はA区中央部、グリッドE・F列の7・8に股がって第4号住居址と重複して検出された。中央部を第4号住居址と同じく暗渠に切られており、検出面から約10cmのレベルで床面と思われる面を検出し住居址壁面の立上がりを追求したのであるが、第4号住居址との重複部分では明確に把握出来ず西側のプランが若干不明確となっている。プランは主軸方向をN-60°Wに持つ4.5(推定)×3.6mの隅丸長方形を呈する。残存する壁高は5~10cmを測り、床面はほぼ平坦で東側は堅緻であったが第4号住居址との重複部ではかなり軟弱な状態であった。覆土は

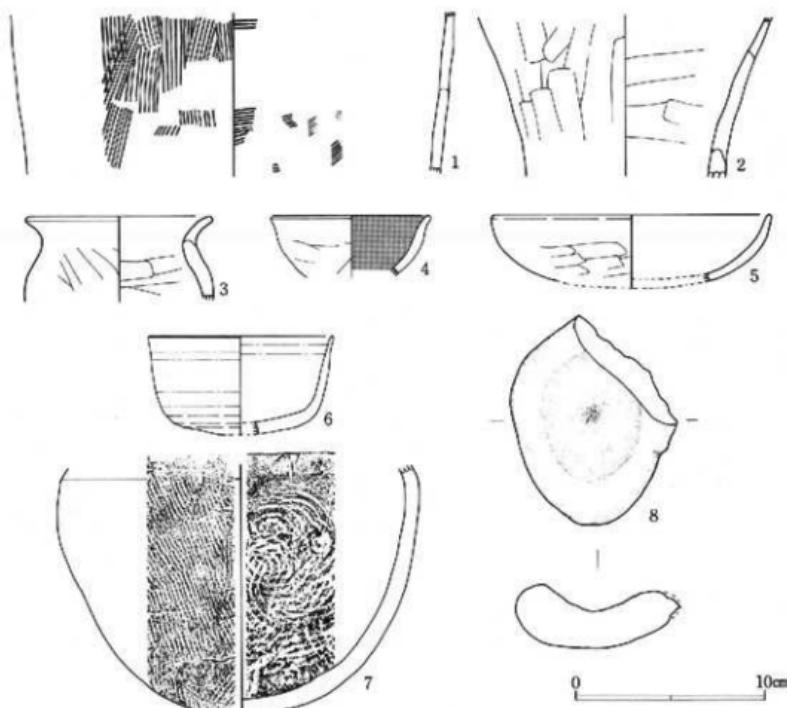


第14図 第5号住居址カマド実測図

黄色粒子を多く含んだ黒褐色土の單一層である。カマドは住居址北壁中央東寄りに設けられており、壁より外へ大きく張り出し、住居址内部には黄褐色粘土で僅かに袖部を形成している。遺存状況は比較的良好で規模は全長90cm、全幅67cmを測り、燃焼部内には焼土や暗褐色土が堆積していた。また、燃焼部中央には $2 \times 4 \times 15$ cm程のやや湾曲した石が直立した状態で検出され、カマドの支柱として用いられたものではないかと推察される。なお、柱穴、周溝等は検出されなかつた。本址の所産期は住居址形態と出土遺物等から奈良時代と推定される。

遺物（第15図）

本址からは土師器、須恵器、石製品が出土している。1～3は土師器の甕で1はカマド左側部より出土した長胴甕で内外面刷毛調整されている。2はカマド内の支柱を囲む状態で出土した長刷甕の底部付近で外反しながら立上がる器形を持ち、内外面窪削りが行われている。二次焼成を強く受けている。3は短く強く外反する口縁部と球形の胴部を持つ小形の甕である。4・5は土



第15図 第5号住居址出土遺物実測図

師器の环で、4はカマド左縁部より出土し、内面が黒色研磨されたやや厚手で小形の环である。5はカマド内部より出土した丸底の环で口縁部が内湾し体部外面には箝削りが行われている。6は須恵器の环で直線的に立上がり、口縁部で僅かに外反する器形を持ち、底部は切り離し後、全面に左回転の回転箝削りが行われ丸底気味となる。胎土、焼成共良好な土器である。7は住居址南部中央より出土した丸底を呈する須恵器の壺で、外面に平行叩き目痕、内面には青海波文が底部から肩部にかけて残る。8は安山岩円礫製の凹石で一部を欠損するが、 $112 \times 89 \times 34$ mmの大きさを有し、重量は298gを測る。

(塩崎)

(6) 第6号住居址 (SB06)

遺構 (第16図)

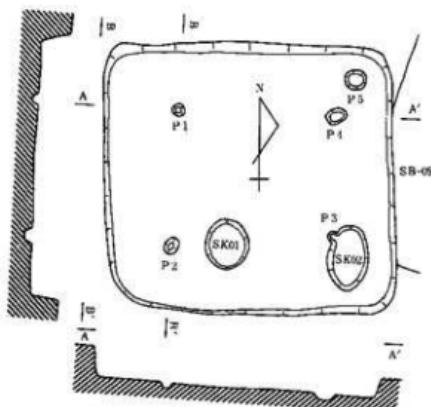
調査区域西寄りA区北側で、第4号住居址(SB04)の東側に隣接して検出された。東西約3.1m、南北約2.9mの隅丸方形の平面プランを呈し、壁は比較的直に掘り込まれ残存壁高26~33cmを有する。床面は最大4cmのレベル差を有するものほぼ平坦で、ピット5(P1~5)及び土壙2(SK01、02)をもつ。P1~4は略円形ないし橢円形で、径15~23cm・深さ7~10cmを有する。

小規模だが柱穴である。柱間は芯々で130~170cmを有する。東西に長い矩形を呈する。2基検出された土壙は、60×46cm・深さ約6cm(SK01)、70×44cm・深さ約8cm(SK02)の平面橢円形で浅い鍋底状を呈する。

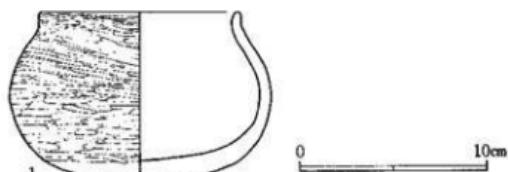
遺物 (第17図)

1は僅かに立ち上がる口縁部を持つ丸底・偏平な球形壺の壺で、口径20.5cm、最大径14cm、器高8.9cmを有する。外面は丁寧に横位のヘラ磨きが施され乳黄色(一部黒色)を、内面も横位ヘラ磨きされ乳黄色ないし乳灰色を呈する。住居址中央より床着で出土した完形品である。本址は出土遺物に乏しく、しかも小破片が殆んどで、図示できるのは上記の1点のみである。

(塩入)



第16図 第6号住居址実測図



第17図 第6号住居址出土遺物実測図

(7) 第7号住居址 (SB07、第44図)

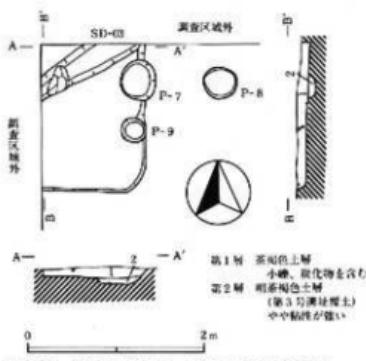
本住居址はA区南東部、グリッドG-5・6に於いて第2号住居址と重複して西壁と南壁の一部が検出された。しかし、黒褐色の包含層中に構築されていた為、プラン検出は困難で調査には至らなかった。なお、グリッドH-5に於いて若干の焼土が検出されており、あるいは本址のカマドではないかと推測される。

(塩崎)

(8) 第8号住居址 (SB08、第18図)

本住居址はA区北西隅部、グリッドD-10より検出された。遺構の大半は調査区域外に在り調査されたのは住居址の南東部の一部のみである。従って規模は不明であるが主軸方向はほぼ南北にあると思われる。残存する壁高は7~10cmを測り、床面は軟弱であった。覆土は小礫と若干の炭化物を含む茶褐色土の單一層であった。本住居址は第3号溝址(SD03)、P-7・9と重複関係を持ち、SD03を切って構築され、P-7・9に切られている。本址は出土遺物皆無でその所産期は不明であるが、本址を切るP-7より平安期の土師器・須恵器片が出土している。

(塩崎)

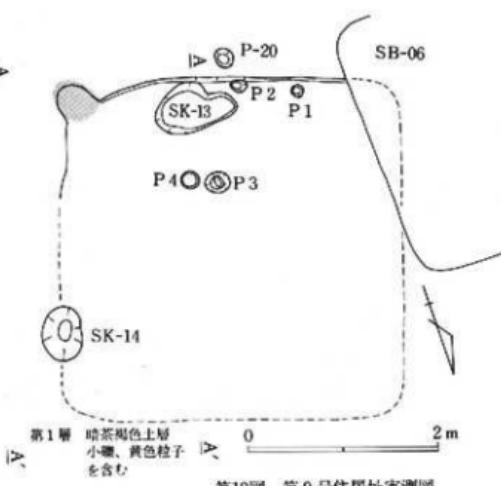


第1層 茶褐色土層
小礫、炭化物を含む
第2層 明茶褐色土層
(第3号溝址覆土)
やや堅性が強い

(9) 第9号住居址 (SB09)

遺構 (第19図)

本住居址はA区北東部、グリッドH・I列の9・10に亘がって検出された。北側は削平されており不明確だが部分的に貼り床の遺存が認められ、おおまかのプランを知る事が出来た。本址のプランは主軸方向をN-20°-Eに持ち、一辺3.6mの隅丸方形を呈するものと推測される。残存する壁高は南壁付近で12cmを測り、床



第1層 喰茶褐色土層
小礫、黄色粒子
を含む

面は前述した様に貼り床の遺存が認められたものの、全体に軟弱であった。覆土は黄色粒子と小礫を含む暗茶褐色土の單一層である。カマドは南東隅部に構築されていたが遺存状況は悪く焼土が僅か残存していたのみである。柱穴、ピットは4基検出され、南壁外側にも柱穴状のピット(P-20)が検出されたが本址との関係は定かではない。本住居址は第6号住居址(SB06)を切って構築され、本址廃絶後に第13・14号土壙(SK13・14)が構築されており、住居址形態と出土遺物から平安時代後期の所産と推定される。

遺物(第20図)

本址からは灰釉陶器の环片2点と若干の土師器が出上している。1は土師器の环高台部で、底部裏面は全面にナメ調整が行われている。2は高さ2.6cmの大きくハの字状に開く高台を持つわゆる足高高台付环である。

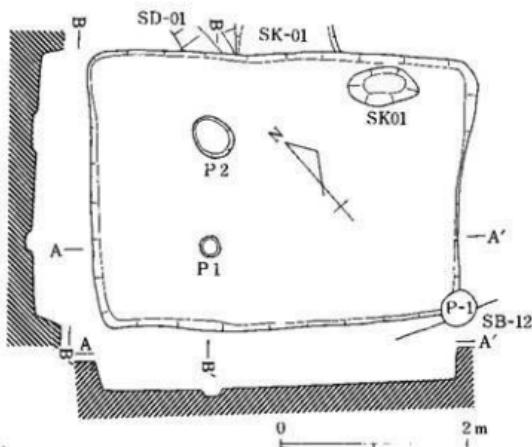
(塩崎)

(10) 第11号住居址 (SB11)

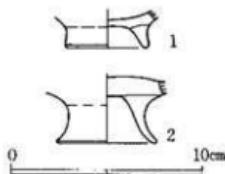
遺構(第21図)

B区西端に検出された。第1号土壙(SK01)・第1号溝址(SD01)を切り構築されており、またP-1によって南コーナーの一部を切られている。南東一北西4.2m・南西一北東2.9mの隅丸長方形の平面プランを呈し、N-49°-Wに長軸方位をもつ。壁は垂直に近く立ち上がり、検出面までの残存壁高27~33cmをはかる。屋内施設としてはピット2(P1・2)・土壙(SK01)をもつがカマドは存在しない。

P1は略円形で径約22cm・深さ6cm、P2は椭円形で48×38cm・深さ5cmをそれぞれはかり、ともに浅い鍋底状を呈するが、柱穴とはみなしがたい。SK01は東コーナー寄りで北東壁に接して検出された72×42cm・深さ約33cmをはかる椭円形土壙である。



第21図 第11号住居址実測図



第20図 第9号住居址出土
遺物実測図

遺物 (第22図)

1は口径22.4cmを有する大型の鉢である。底部から内湾しながらやや外に開き直線的に口縁部に至る。縁部で



第22図 第11号住居址出土遺物実測図

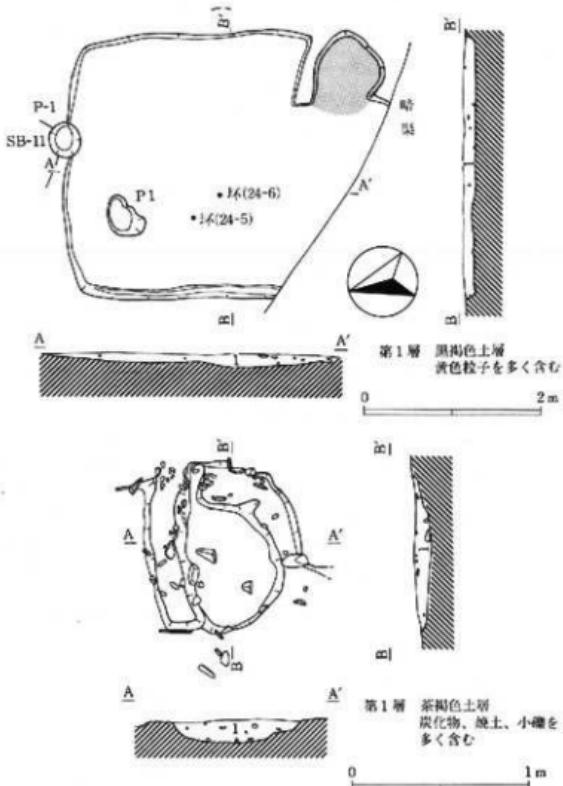
一端僅かに外反し口唇部で再び内湾して嘴状の口唇部をつくる。あまり類例をみない。2は高環で、環上半と脚根部を欠く。スカート状に開く脚に円形透孔をもつ、時期的に問題がある。

(塙入)

(II) 第12号住居址 (SB12)

遺構 (第23図)

本住居址はB区西部のグリッドM-6、N-5～7よりP-1に北壁の一部を切られて検出された。B区南端に構築されていた暗渠に因り南側が切られており一部不明であるが、プランは主軸方向をN-16°-Eに持つ4.0×3.1mの隅丸長方形を呈するものと推定される。残存する壁高は6～15cmを測り、壁は比較的緩やかに立上がる。床面はほぼ平坦で北西部では黄褐色の比較的堅緻な床面が検出されたが、南東部ではB区中央部に分布する砂礫層の一部がかかり1～5cmの小窪が多く量に露出した黒褐色土で非常に軟弱な状態であった。覆土は多量の黄色粒子を含んだ黒褐色土の單一層でやや粘性があり、南東部



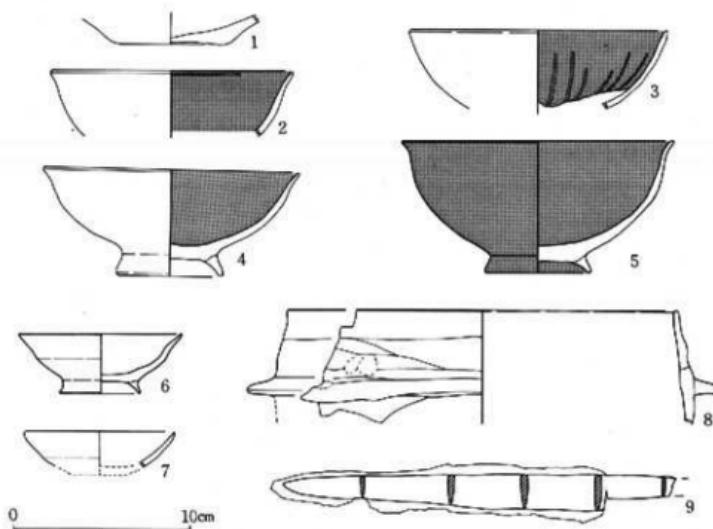
第23図 第12号住居址・同址カマド実測図

では小礫が大量に混入していた。カマドは住居址南東隅部に構築されており、全長100cm、全幅105cmの規模を有する。遺存状況は悪く小礫を大量に含んだ暗褐色粘土で構築された袖部が僅か残存していたのみである。ピットは北西部に1基検出され、47×40cmの不整梢円形で深さは5cmを測る。また、西壁には幅10~16cm、深さ1~3cmの周溝が検出された。本址の所産期は住居址形態と出土遺物から平安時代後期と推定される。

遺物（第24図）

本址からは土師器、土師質土器、鉄製品が出土した。須恵器は自然釉のかかった甕の肩部片が1点出土したが細片で図示出来ない。1は土師器の甕底部である。2~6は土師器の高台付环である。2~4は内面が黒色研磨され、2の口縁内側には1条の沈線が認められる。同様の土器は第1号住居址で灰釉陶器が出土しており（第3図21）、本例はそれらの灰釉陶器を模倣したものではないかと推察される。また、3の内面には放射状の暗文が観察される。5は底部裏面を除き丁寧な範磨きが行われた後、内外面の全面に炭素吸着処理が施されている。4・5の底部裏面は中央部にのみ僅かに糸切痕が残り、周囲はナデが行われている。6は小形の环で、強く張った高台と外面に棱を持って外反する环部を有し、底部裏面には右回転の糸切痕が見られる。7は土師質土器の环で内湾する器形を持つ。8はカマド付近より出土した羽釜であるが調整、鋲部の取付けはかなり粗雑である。2次焼成を受け赤褐色を呈する。9は残存部の全長23.2cmを測る平造の刀子類で、茎基部を欠損しており、鍔着が著しい為刃部先端の形状は不明確であるが推定刃渡りは18.5cm、元幅2.0cmを測る。

（塙崎）

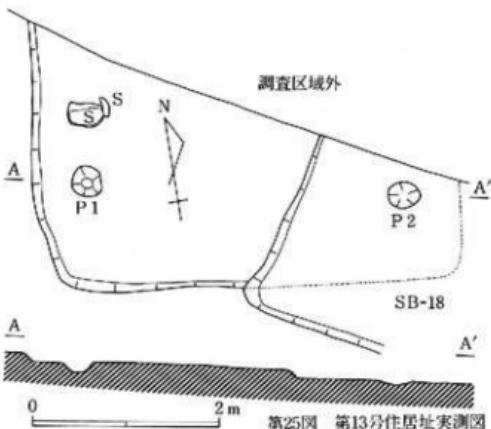


第24図 第12号住居址出土遺物実測図

⑫ 第13号住居址 (SB13)

遺構 (第25図)

B区北端の河岸段丘崖際に検出された。堆土の関係と第18号住居址 (SB18) に切られていることから全容を明らかにしえなかったが、段丘崖までの残存距離から、北側の一部は浸食により破壊されているものの如くである。南壁及び西壁の一部とそれに挟まれた南西コーナーが検出されただけで、検出面までの壁高も低く5~10cmをはかるのみであり、壁面の傾斜は緩やかである。屋内施設としてはピットが2基 (P1・2) 検出された。位置的に柱穴とみなしてよいであろう。P1の北70cmに上面平坦な砂岩が据えられているが、作業台的なものであろう。

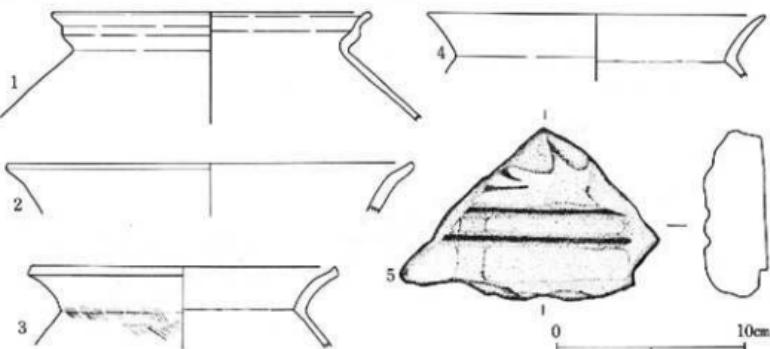


る2条の研磨溝をもち、その上部にも浅く途中までの研磨溝がみられる。淡い青味を帯びた灰色を呈する。どのようなものを研磨したのかは不明である。

(塩入)

遺物 (第26図)

1は口径16.8cmのS字口縁台付甕で、胴部以下を欠く。口縁部は緩やかな「S」字を描き、肩の張りも緩い。焼成はあまり堅緻でなく、器面は荒れている。2~4は頸部のくびれの強い甕で、いずれも口縁部の破片よりの図上復元である。2・3はつまみ上げによる面取状の口唇部をもち、3の頸部外面には細かなハケ目が施されている。5は硬質砂岩製の筋砥石である。中央部に幅約8mmの平行す



第26図 第13号住居址出土遺物実測図

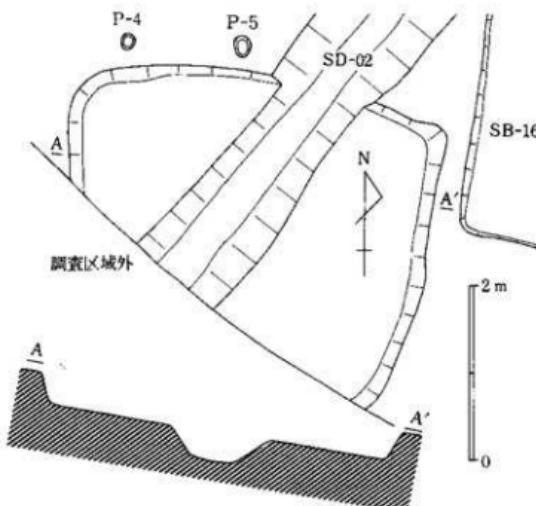
(13) 第15号住居跡 (SB15)

遺構 (第27図)

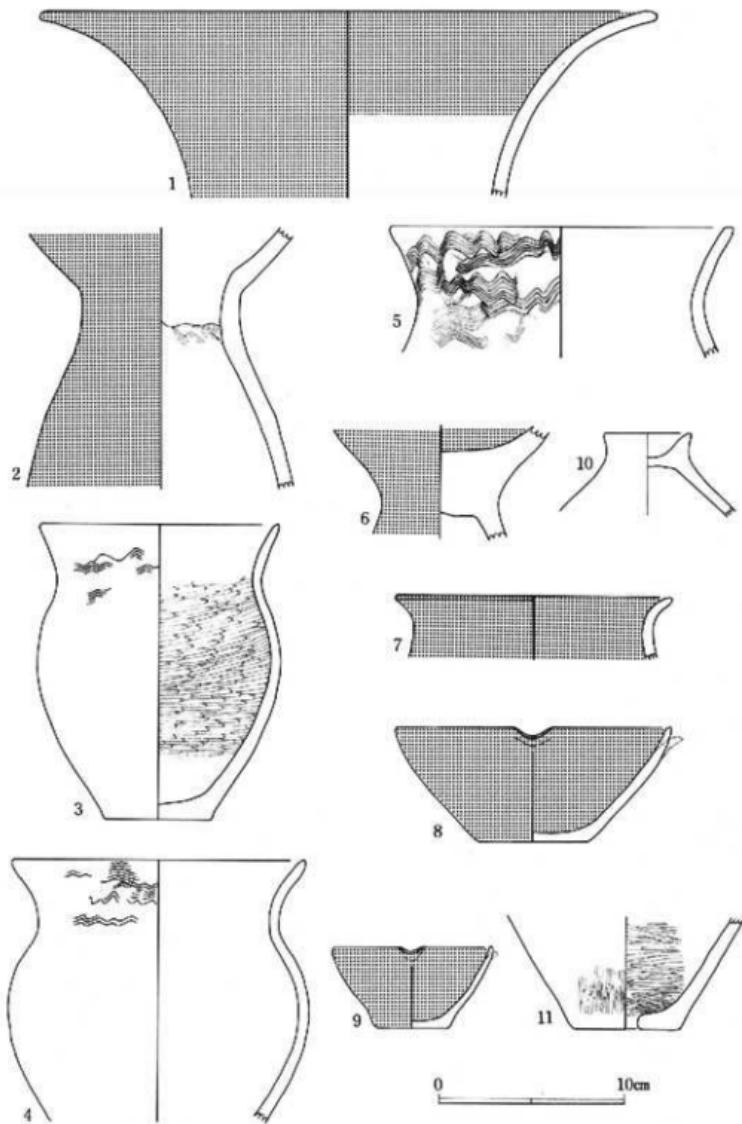
B区東寄りの南端で、第16号住居址 (SB16) の西側に隣接して検出された。西半部は流れ込みと思われる礫群を切り、やはり一部で礫群を切る第2号溝 (SD02) を切って構築されているが、床面の方が SD02 溝底より高いため住居址内においては南西から東北に対角線状に走る溝を埋める形になっている。また、南から南西部にかけてのおよそ 1/4 を暗渠水道により破壊されており、その他堆土の関係などから、結局全体の 3/4 ほどを調査できたにすぎない。このように、全容を把握できなかったものの、北東・北西の 2 コーナーとそれに挟まれる北壁及び東壁・西壁の一部を検出でき、この内東壁南端部は僅かに弧を描き始め、コーナーが近いことを示しているので、東西約 4.3m、南北約 3m の東西に長い隅丸長方形の平面プランを呈するものと思われる。検出面までの現存壁高は 31~35cm をばかり、70~75° と強い立ち上がりをみせる。

床面は最大で 3cm ほどのレベル差がみられるがほぼ平坦で、屋内施設は何も検出されなかった。しかし、北壁外側に約 15~20cm 離れて検出された 2 基のピット (P-4・5) は、P-4 が略円形で径約 20cm・深さ約 18cm を、P-5 が 24×18cm の楕円形・深さ約 13cm をそれぞれはかるもので、芯々で約 130cm はなれて掘られており、屋外ピット状である。ただ、2 基のみの検出で、他には検出されなかったこと、また垂直に掘り込まれている点などから屋外柱穴とはみなしづらいが、そのありようは本址に伴うものと考えられよう。

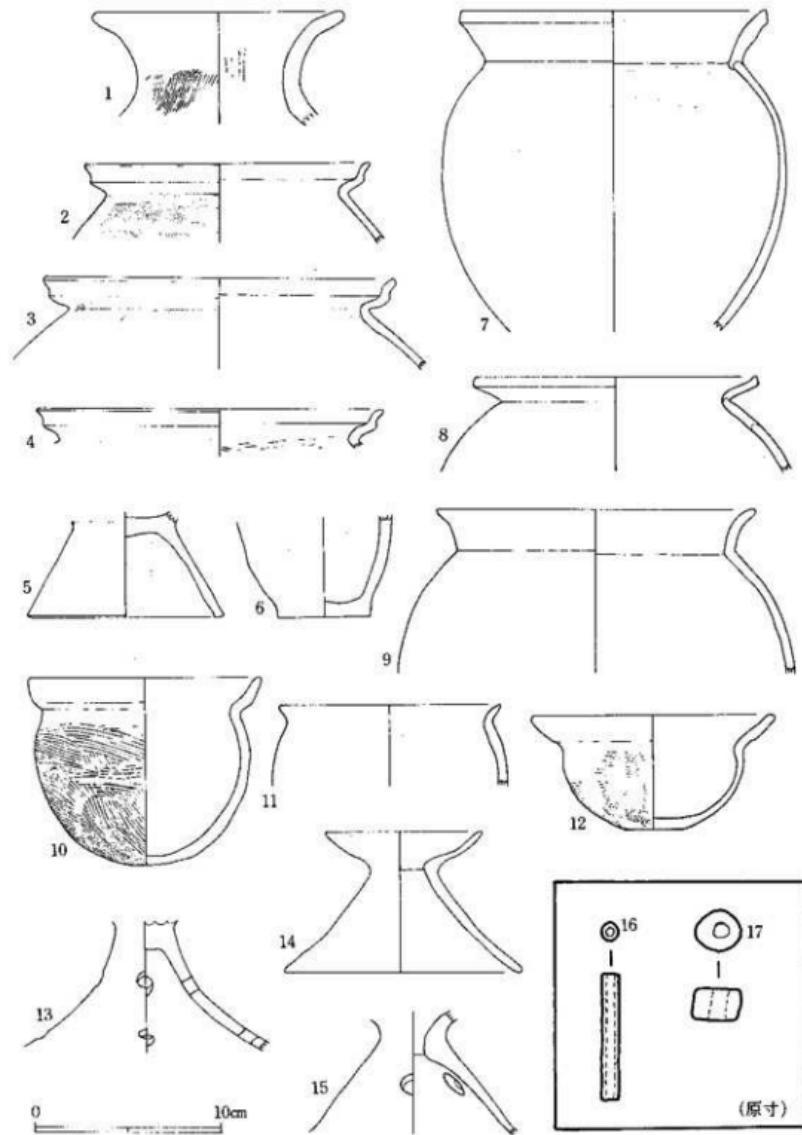
覆土層は 2 層に分けられ、上層は拳大から小兒の頭大の礫が多量に混入する黒褐色土層で、厚さ 17~24cm をはかる。下層は拳大の礫を比較的多く混入する黒褐色土層で、12~14cm の厚さをもつ。遺物は両層から溝遍なく出土しており、連続する 2 時期の造物が上下逆転して混在しているが、上層からの方がやや多いようである。(塙入)



第27図 第15号住居址実測図



第28図 第15号住居址出土遺物実測図(1)



第29図 第15号件:居址出土遺物実測図(2)

遺物（第28・29図）

弥生時代後葉から最終末ないし古墳時代最初頭に位置づけられる遺物が多量に出上した。前述した通り連続する2時期に分けられるものの、出土土層によって所處時期を区分することは不可能である。ここでは一応2時期に分けておく。

弥生時代後葉に位置づけられるものには、壺・甕・高環・深鉢・片口鉢・蓋・瓶などがある。（第28図）。1は口径33cmの内外面赤色塗彩された壺で、頸部以下を欠いており、施文については不明である。頸部から強く外反して口唇に至る通有の形のものである。3～5は甕であるが、全器形の知れる3は弥生時代後期後半の典型的な器形を呈するのに対し、4はすづまりの球形胴を呈する。3点とも外面が荒れていて、特に3・4は文様が僅かに残るにすぎない。施文の状態が比較的良く観察される5においても、櫛引き波状文のみの施文で頸部の継状文は施されていない。7は深鉢の口頸部で、良く磨かれて赤色塗彩が施されている。大小の片口鉢（8・9）は相似した形を示し、内外面とも赤色塗彩されているが、2次焼成を受けて器面は荒れている。蓋（10）は整形良好だが、赤色塗彩のないものである。11は瓶底部で底部中央に径1.3cmの一孔が穿たれている。外面は縦位に、内面は横位にヘラ磨きされている。以上の外に壺・甕の体部・底部破片や高環破片などが出土しているが、全て弥生時代後期後半の箱清水式土器の範疇に入るものであり、甕などの特徴からその中でも後葉に位置づけられるものである。

弥生時代最終末ないし古墳時代最初頭に比定できるものとしては、壺・甕・鉢・高環・器台などがある（第29図）。1は器肉の厚い灰褐色の壺で、外面頸部をやや粗い縦位・斜位のハケ調整をしている。2～5はS字口縁台付甕である。2・3は頸部から肩部にかけての縦位・横位の細かいハケ目が良く観察できる。2～4はS字形の屈曲も明瞭で暗灰褐色を呈し焼成堅緻である。5の脚台端部は内側への折り曲げが僅かに見られる。甕7～9は頸部で強く屈曲し、7・8は面取り状の口縁部をもち、特に8はつまみ上げにより口唇部を形成しているのに対して、9は比較的直に立ち上がる頸部から強く外反する口縁部に至るもので、面取りされていない。7は体部外面と内面の頸部直下にハケ目が見られる。7・9が焼成良好だが器面ザラついているのに対して8は焼成堅緻である。3点ともやや赤味を帯びた褐色を呈する。10はやや内湾気味の口縁部が肥厚して外面に僅かな段を形成する小型の甕で、外面の肩部以下全面に粗いハケ調整を施す。胎土に細砂粒が多く、ザラつく。赤褐色ないし暗褐色を呈する。12も10同様の肥厚して僅かな段を成す口縁部をもつ鉢で、頸部から強く開いて口縁部に至り、底部は丸底に近い平底をもつ。細砂粒を多く含み褐色を呈する。13は高環（または器台）で環部（器受部）を欠いている。脚部には4方向2段に合計8ヶの円孔が穿たれている。器台14・15は貫通孔を有するもので、14は内湾する器受部とスカート状に広がる脚部を持ち、12の鉢に似通った胎土・色調を呈する。15は3孔をもつ。16は鉄石英製細形管玉で、長さ2.2cm・太さ3.3mm・孔径1.5mmをはかり褐色を帯びた赤色を呈する。17は大型で紺色のガラス小玉である。これらの遺物は、特にS字口縁台付甕などから弥生時代最終末から古墳時代最初頭の御屋敷Ⅱ式期に位置づけられよう。

（塩入）

(14) 第16号住居址 (SB16)

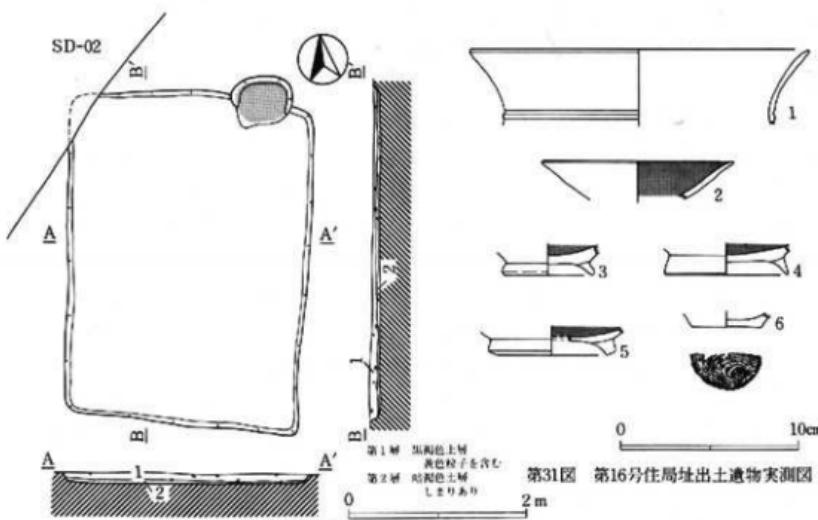
遺構 (第30図)

本住居址はB区東側中央部のグリッドR・S列の3・4に亘がって第2号溝址 (SD02) を切って検出された。プランは東壁のわずかに長い隅丸長方形を呈し3.8×2.8mの規模を有する。主軸方向はN-8°-Eに持つ。残存する壁高は5~12cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は中央部に向かいわずかに傾斜するもののほぼ平坦で比較的堅緻であった。覆土は2層に分けられ、上層は黄色粒子を含んだ黒褐色土、下層はしまりに富んだ暗褐色土である。カマドは北壁東寄りに構築されていたが遺存状況は悪く、若干の掘り込みと焼土が残存していたのみである。また、住穴、周溝等は検出されなかった。本址の所産期は住居址形態、出土遺物等から平安時代後期と推定される。

遺物 (第31図)

本址からは須恵器片2点と土師器、土師質土器の小片が若干出土している。1は土師器長胴甕の口縁部で非常に薄く作られ、頸部に1条の凹線が廻っている。2~5は内面黒色研磨された土師器の环である。2の口縁部には厚く油煙が付着し、燈明皿として用いられた事が窺われる。3~5は高台部で、5の高台端部には面取りが加えられている。底部裏面はいずれも全面にナデが行われている。6は土師質土器の环底部で裏面には右回転の糸切痕が観察される。なお、内外面黒色研磨された土師器の环も出土しているが小片で図示出来ない。

(塩崎)



第30図 第16号住居址実測図

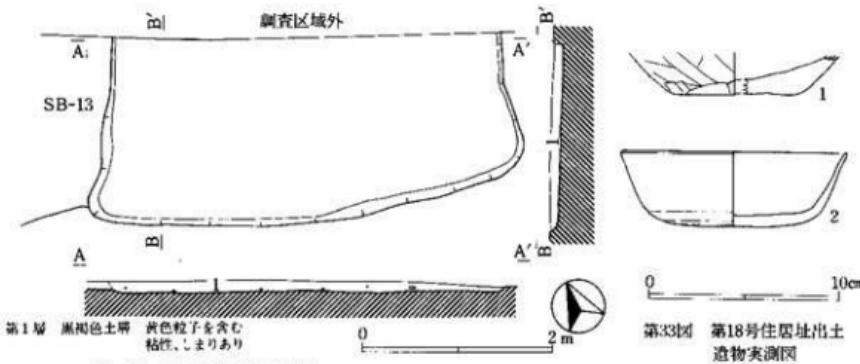
(15) 第18号住居址 (SB18)

遺構 (第32図)

本住居址はB区中央北側のグリッドP・Q列の7より第13号住居址 (SB13) と重複して検出された。本址の大半は調査区域外の為、N-70°-Wを指す4.7mの南壁を検出したのみである。プランは南壁のやや長い隅丸長方形を呈するものと推測される。検出面からの壁高は東側で6cm、西側で13cmを測り、壁は緩やかに立上がる。床面は比較的堅緻であった。覆土は黄色粒子を含む黒褐色土の單一層でやや粘性が有り固くしまっていた。カマド、住穴等の施設は検出されなかった。本址は第13号住居址を切って構築されており、出土遺物から奈良時代若しくは平安時代前期の所産と推定される。

遺物 (第33図)

本址から出土した遺物はその殆どが土師器の細片で図示出来たのは2点である。1は土師器の邊底部で、多量の小砂粒を含んでおり、施削り調整が観察される。2は焼成不良で非常に軟弱な須恵器の環で底部は切離し後左回りの回転施削り調整が全面に行われている。(塙崎)



(16) 第19号住居址 (SB19)

遺構 (第34図)

B区東端の段丘崖端において第20号住居址 (SB20) と重複して検出された。排土の都合により全体の調査はできなかったが、南・北・西の3コーナーを検出した。その結果、長軸方位をN-49°-Eにもつやや不整形の隅丸長方形の平面プランを呈するものと考えられ、南東-北西3m、南西-北東4mを想定できる。検出面までの残存壁高は低く、7~11cmをはかれるのみである。床面に検出された土壌SK01は北西壁を破壊して掘られており、後世の土壌が本址を切っている

ものであろう。ピットP2もSK01とうまく重複するため、本址に伴うものではないかもしれない。その他の屋内施設は検出されなかった。南西壁際、南コーナー寄りに土器がやまとまって出土したが、出土遺物は極めて少ない。

遺物（第35図1,2）

出土遺物は僅少であったが、南西壁際にやまとまって出土した土器片から2点が図示できた。1は外面に縦位・斜位の細かいハケ目が見られる壺の体下半部と径の小さい平底底部である。2は器受部に棱を、また脚部に円形透かし孔をもつ器台で、乳黄褐色を呈する。（塗入）

（17）第20号住居址（SB20）

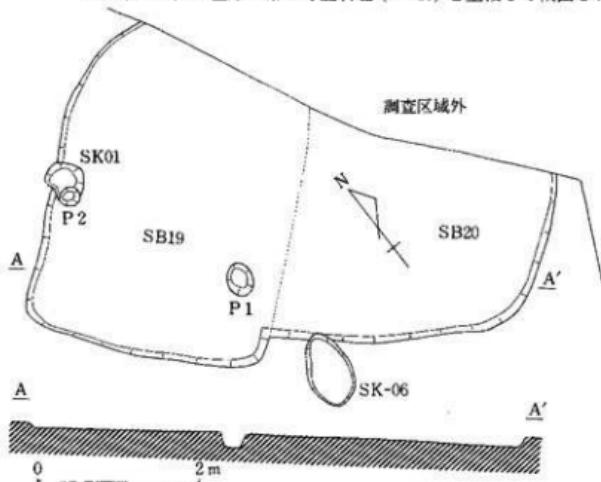
遺構（第34図）

B区東端の段丘崖際に第19号住居址（SB19）と重複して検出された。SB19同様、全容を調査し

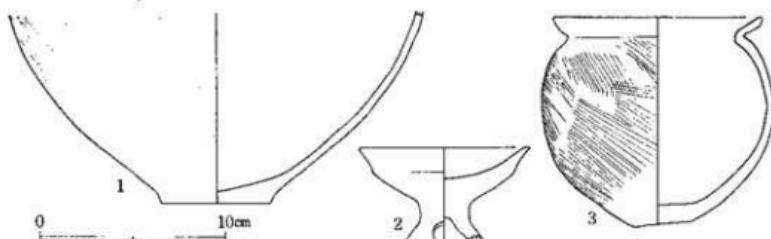
えず、南東壁・南西壁と南
コーナーを検出したにすぎ
ない。床面のピット（P1）
は本址に伴うものと考えら
れ、そうすると南東一北西
約4m前後という規模が復
元できる。

遺物（第35図3）

出土遺物は極めてすくな
く、3が図示できたのみで
ある。口径・器高とも11cm
の小型壺で、外面は斜位の
粗いハケ調整が施されてい
る。暗褐色を呈する。（塗入）



第34図 第19・20号住居址・第6号土塙実測図

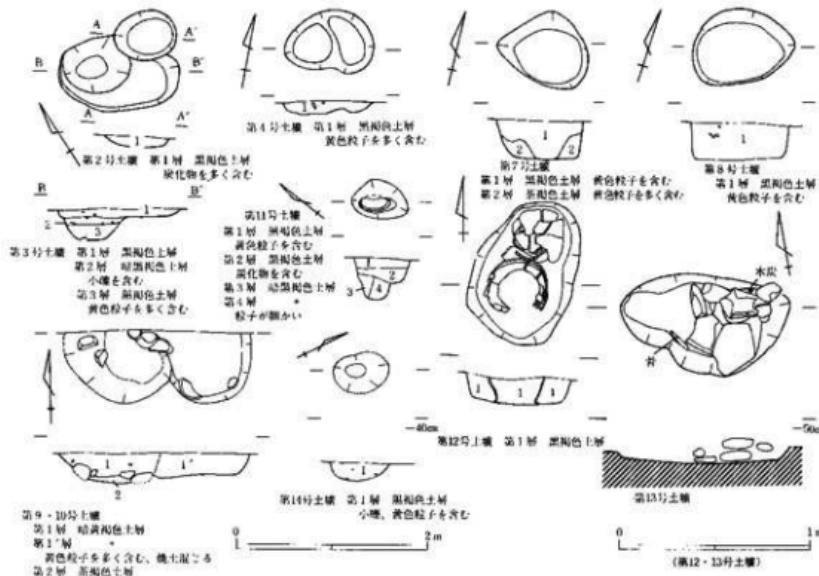


第35図 第19・20号住居址出土遺物実測図

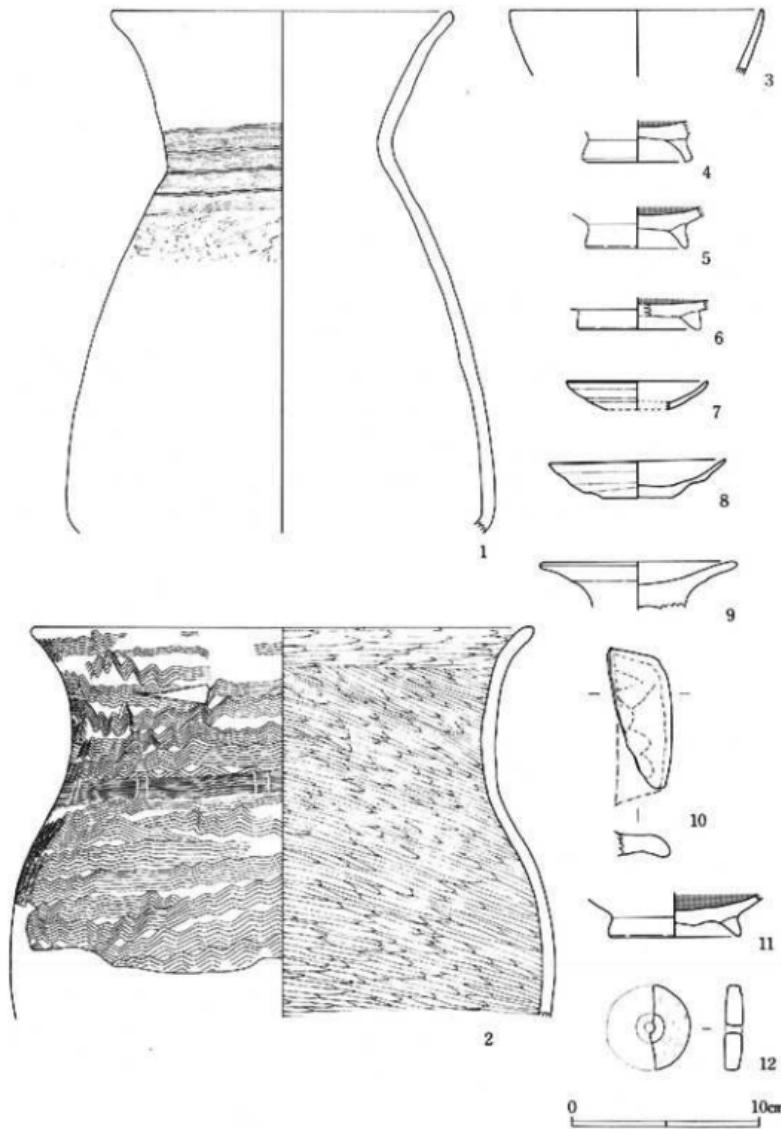
2 土 壤

本遺跡より検出された土壌は総計14基である。その内、9基が何らかの重複関係を持ち、出土遺物と併せて殆どの土壌の所産期が推定可能である。平面形態は楕円形若しくは不整楕円形を呈し、断面形態は殆どが鍋底状か丸底状を呈する。各土壌の計測値は一覧表にまとめた。以下、重複関係、出土遺物を中心に概述したい。(第1号土壌はSK01と略す。他も同じ)

弥生後期の土壌はSK04・07・08・11・12がある。SK07・08はA区北西部に隣接して検出されたほぼ共通の規模を有する土壌で、弥生土器の小片と共にSK08からは粘板岩製の紡錘車半欠品が出土した(12)。直径45mm、厚さ9.5mmで丁寧に磨かれており中心孔の周間に1条の沈線が刻まれている。SK12からは壺・甕各1点が出土した。いずれも伏せた状態で出土しており、体下部を欠く。甕(1)は口縁部が短く外反の弱い器形で、頸部文様はT字文の退化を示し、赤色塗彩されない。甕(2)は焼成堅緻で比較的整った波状文と簾状文を施し、内面は斜位にヘラ磨きする。SK01は弥生期の第1号溝址を切って構築され古墳時代の第11号住居址に切られており、出土遺物からも弥生時代終末期から古墳時代前期にその所産期が求められる。また、遺物は皆無だがSK05は第3号住居址を、SK06は第20号住居址をそれぞれ切っており、各住居址の廃絶後に構築された事



第36図 第2~4・7~14号土壌実測図



第37図 土塙出土遺物実測図

が知られる。SK03・09・10からは平安時代後期の土師器、土師質土器等が出土している。SK09はSK10を切っており、SK10からは内面黒色研磨された土師器の高台付环(11)が出土しており、SK09からは同じく内面黒色研磨された土師器高台付环(4~6)の他に内湾する口縁部を持つ环(3)、土師質土器の环(7・8)、非常に肉厚の高台部を持つ皿(9)、内耳鍋に近い胎上の取手部と思われる破片(10)等が出土している。SK02はSK03を、SK13・14は第9号住居址を切っており、平安時代後期以降の遺構と思われる。SK13からは十数個の河原石の集石と共に骨片、木炭片等が出土し明らかに墓壙と推察される。

(塩入・塩崎)

土壤一覧表

番号	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	長軸方位	出土遺物
1	N-O-8	楕円形	—	90	8	N-43°-E	弥生土器・土師器片
2	R-5	*	65	55	14	N-71°-W	無
3	*	*	130	80	36	N-53°-W	土師器・土師質土器片
4	R-3	不整楕円形	95	70	14	N-80°-E	弥生土器片
5	D-6	*	110	76	11	N-5°-E	無
6	T-2	楕円形	95	55	8	N-21°-E	無
7	E-10	不整楕円形	100	75	46	N-86°-W	弥生土器片
8	*	*	110	78	32	N-76°-E	弥生土器片・石製紡錘車
9	F-10	楕円形	95	—	30	N-35°-W	土師器・土師質土器片
10	*	*	100	—	11	N-20°-W	土師器片
11	F-9	*	60	42	47	N-30°-W	弥生土器片
12	*	*	80	55	19	N-25°-E	弥生土器壺・甕
13	H-I-9	不整楕円形	90	50	10	N-79°-W	骨片・木炭・集石
14	I-9	楕円形	60	45	26	N-15°-E	無

3 溝 址

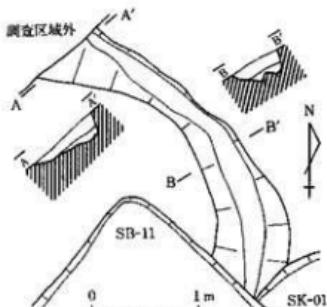
(1) 第1号溝址 (SD01) (第38図)

B区西端に第1号土壤(SK01)・第11号住居址(SB11)に切られて検出された。幅28~74cm・深さ17~24cmをはかり、出土遺物は小破片僅少である。

(2) 第2号溝址 (SD02)

遺構 (第39図)

B区東寄りで検出され、第15・16号住居址(SB15

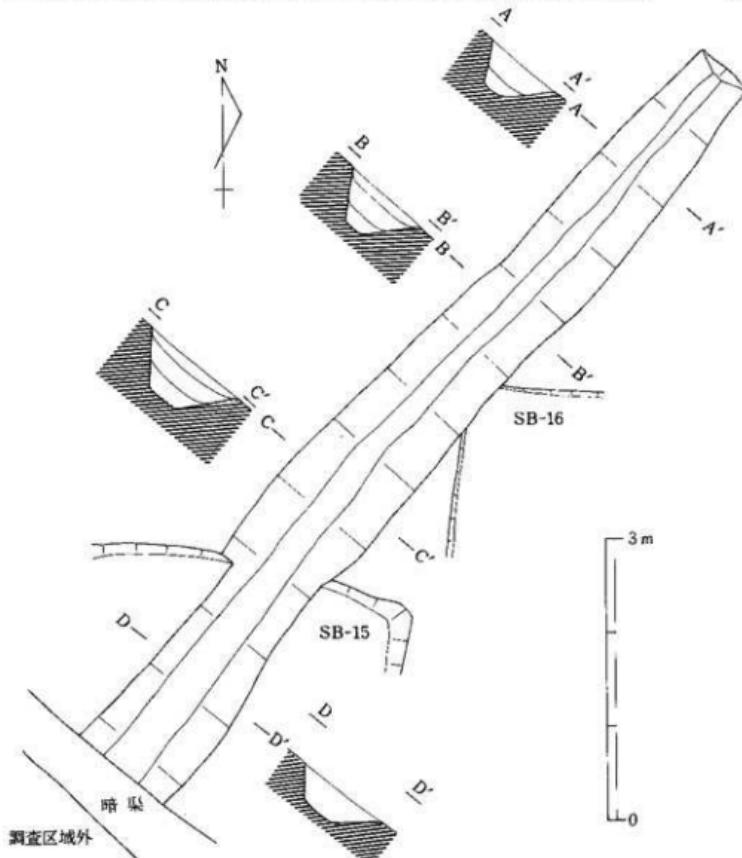


第38図 第1号溝址実測図

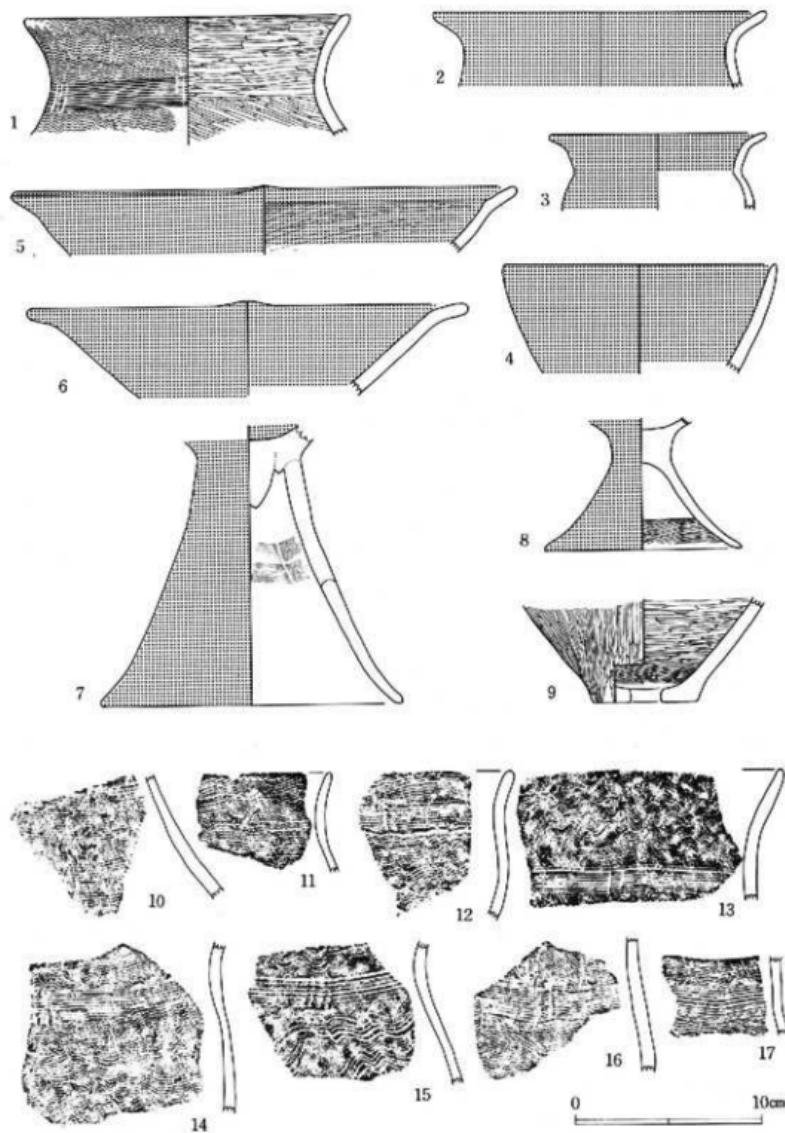
・16) により切られる南西一北東の直線的溝である。幅・深さとも南西部で大きく、北東部で小さい数値を示し、幅124~66cm、深さ60~33cmで、断面形状は逆台形を呈する。

遺物 (第40図)

かなりの出土量があり、壺・甕・高杯・深鉢・鉢・甑が認められるが、小片が多く、図上復元できたものは多くない。1は肩部以下を欠く壺で、比較的端整な波状文を施し、頸部には13本一単位の篆文状文を施文する。焼成堅致で灰褐色を呈する。2・3は内外面赤色塗彩の深鉢、5~8は脚部内面を除き全面赤色塗彩される高杯、9は径1.6cmの一孔を穿つ甑である。拓影で示したものも含め、全て弥生時代後期後半の箱清水式期に属する典型的なものである。 (塩入)



第39図 第2号溝址実測図

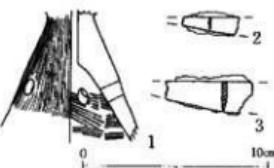


第40図 第2号溝址出土遺物実測図

4 ピット

本遺跡から検出されたピットは総計21基である。各ピットの計測値は一覧表にまとめた。何れも略円形或いは楕円形の柱穴状を呈している。B区中央部でやや集中して検出された以外は分散して検出されており、掘立柱建物址を構成する様なピット群は検出されなかった。全体に出土遺物、重複関係に乏しく所産期を推定出来るものは僅かである。図示出来た出土遺物はP-8より出土した弥生時代終末期から古墳時代初頭期に比定される外尚磨きされ、貫通孔と脚部に5穴を有する器台

(1) と、P-16より出土した刀子2点(2・3)のみである。



第41図 ピット出土遺物実測図

(塙崎)

ピット一覧表

番号	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1	N-6	略円形	35	34	30	土師器片	SB11・12を切る
2	Q-6	楕円形	40	30	13	土師器片	
3	R-5	略円形	40	40	13	無	
4	P-5	*	20	15	18	無	SB15の外柱穴?
5	Q-4	*	25	18	13	無	*
6	R-2	*	35	32	20	無	
7	D-10	*	48	40	32	土師器・須恵器片	SB08を切る
8	*	*	40	38	40	弥生土器・土師器片	
9	*	*	30	29	26	無	SB08を切る
10	F-9	*	35	25	28	弥生土器片	
11	P-5	*	30	28	17	無	
12	Q-6	*	50	40	19	無	
13	R-5	*	30	25	6	土師器片	SB14を切る
14	P-6	*	30	25	6	無	
15	P-5	楕円形	50	35	17	無	
16	G-6	略円形	33	30	22	刀子	
17	P-3	*	40	35	17	弥生土器・土師器片	SB15を切る
18	Q-3	*	30	30	15	無	*
19	*	*	35	30	15	無	*
20	H-9	*	25	22	5	無	SB09に隣接
21	Q-3	*	35	31	10	無	SB15を切る

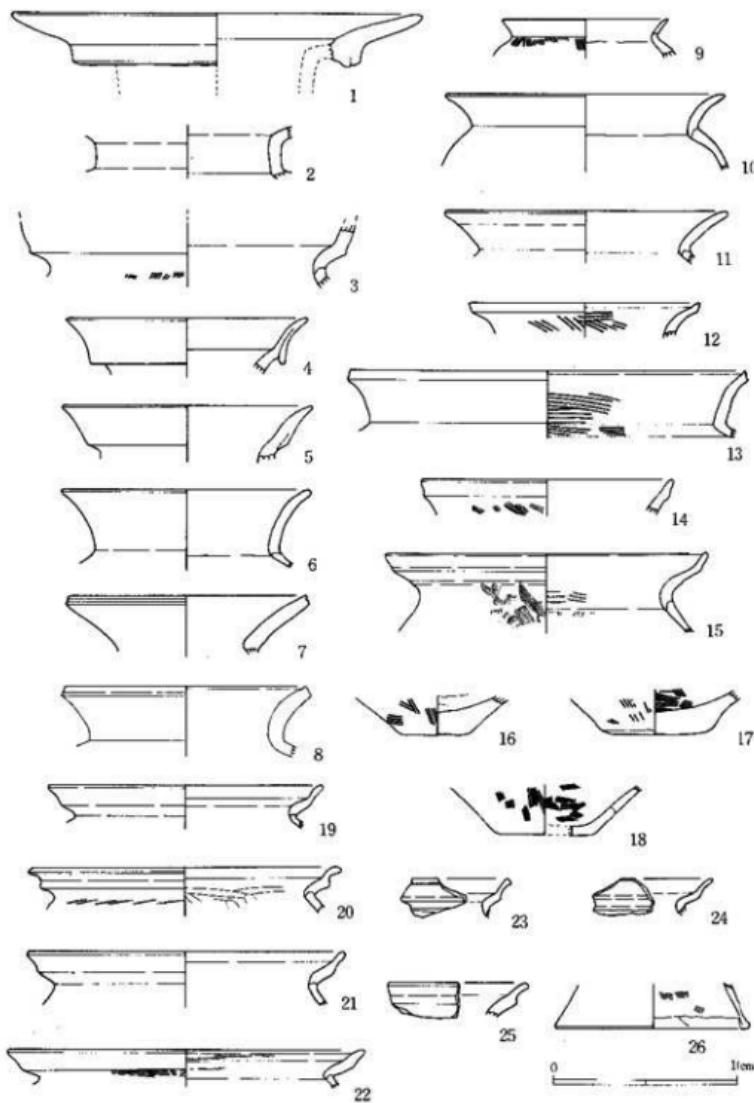
5. 包含層出土の遺物

(1) 古墳時代前期の遺物 (第42図1～第43図40)

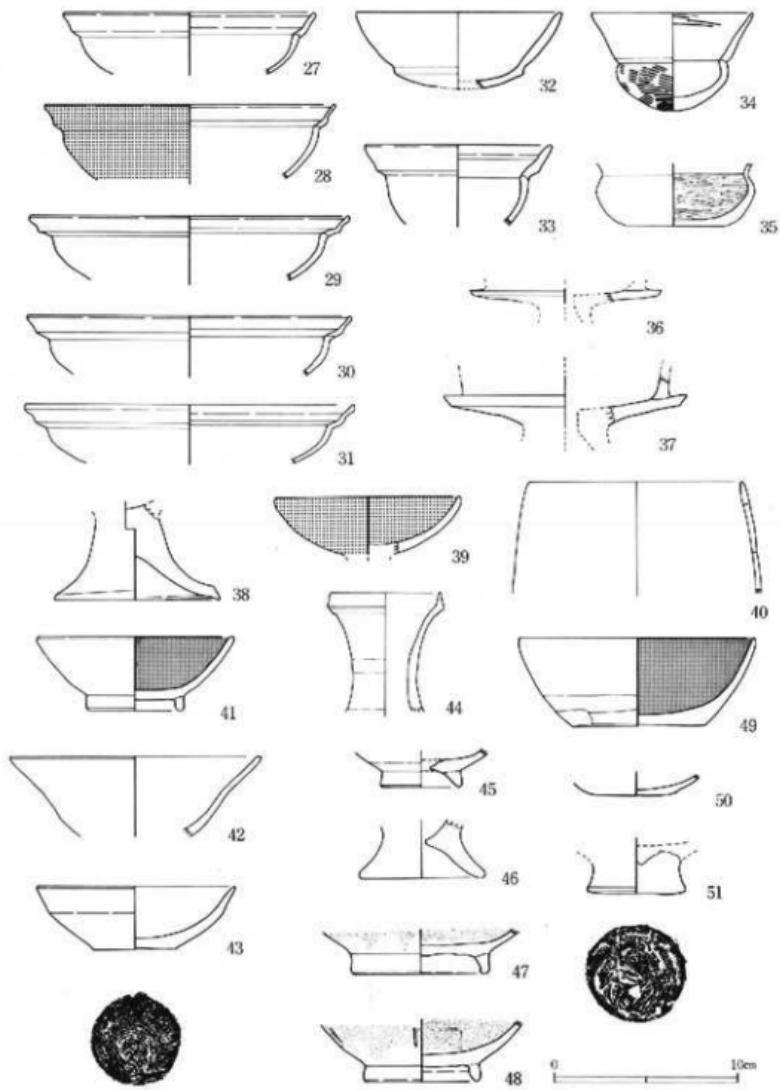
第4号住居址の項で前述した様に同址覆土及び、周辺グリッドから古墳時代前期に比定される土師器片が多量に出土しており、該期の遺構を破壊して第4号住居址が構築された可能性が強く推測されるが、該期遺構存在の確証が得られない為、本項で扱う事とした。一部にやや時間差を感じさせる遺物も含まれているものの、概ね古墳時代最初頭期に位置付けられる資料である。なお、1・8・31が周辺グリッドからの出土で、他は第4号住居址覆土からの出土遺物である。

1～8は壺形土器のII縁部である。1・2は一旦直立した後二段に外反する二重II縁を持ち、胴部は球形を呈すると思われる。3は頸部で丸く外反した後直立的に立上がる器形を持つ。頸部外面は刷毛整形されている。4・5は折返し口縁を持つ。6～8は肩曲して外反する口縁部で、6は端部が丸くおさめられ内外面窪磨きされている。7・8は端部が面取りされるが7の面取り部には1条の凹線が残っている。9～26は壺形土器である。9は小形の壺で短く強く外反するII縁部を持ち、外面は刷毛整形される。10・11はくの字状に外反する単純口縁を持つ。12・13は口縁部が面取りされ、横ナデにより上方に肥厚する。内外面荒い刷毛整形される。14・15は口縁部が外側に緩い稜を持って立上がり複合口縁を呈する。比較的細かい刷毛整形が行われている。16～18は平底の底部で、何れも内外面刷毛整形されている。19～26はS字状口縁付壺形土器の口縁部と脚台部である。口縁部はそれぞれ整形に微妙な相違が観られるが、口縁が外方に開き端部が丸く仕上げられ、外面の刷毛目は殆ど消失するなど後出的な要素が強い。また、脚台部も端部が折返された後出的なタイプである。27～31は浅い丸底の体部にS字状に肩曲外反するII縁部を持ついわゆる鉄兜形の鉢である。何れも精良な胎土を用い、体部は内外面窪磨きされた後内面はナデ整形され、II縁部は横ナデされる。焼成は堅緻で赤褐色を基調とするが、27のみは口縁部の仕上げ、焼成が甘く他と明らかに異なる。また、28は外面に赤色塗彩が施されている。32は偏平な体部に僅かに内湾する長いII縁部を持つ小形壺で、外面には明瞭な段があり、内外面丁寧な窪磨きが施されている。33はやや深い体部に稜を持って外傾する複合II縁を持つ鉢である。34・35は一括で出土した小形丸底壺と平底を持つ小形壺である。共に白色粒子を多量に含んだやや砂質の胎土で暗赤褐色を呈し、34は刷毛整形された後II縁部と内面はナデ整形される。また、35は内外面窪磨きが行われている。36・37は器受部が鋲状に張り出す特殊器台である。共に鋲部先端は面取りされている。38は高環脚部で端部は面取りされ、一部下方に肥厚する。接合部はかなり偏心して作られており、内外面ナデ整形される。39は高環脚部で半球形の器形を持ち、内外面窪磨きの後赤色塗彩が施されている。40は無頸壺と思われ、内外面丁寧な窪磨きが行われている。

以上の遺物のうち特に注目されるのは27～35の鉢と壺である。27～31の鉄兜形の鉢は畿内地方の布留式古段階期にその出自が求められ、千曲川水系では初見の資料である。27を除く4点は胎土やII縁部の作りから畿内方面からの搬入品である可能性が強いと思われる。32も出土例が稀少



第42圖 包含層出土遺物實測圖（1）



第43图 包含层出土物实测图 (2)

の遺物であるが34・35等と共にやはり畿内の布留式古段階期にその系譜が求められよう。33は小県郡長門町中道遺跡第1・11号住居址等で類似の彫形土器が出土しており、口縁面取り部に凹線を持つ彫形土器等と共に北陸地方（古府ケルビ期）にその系譜が求められる資料と思われる。

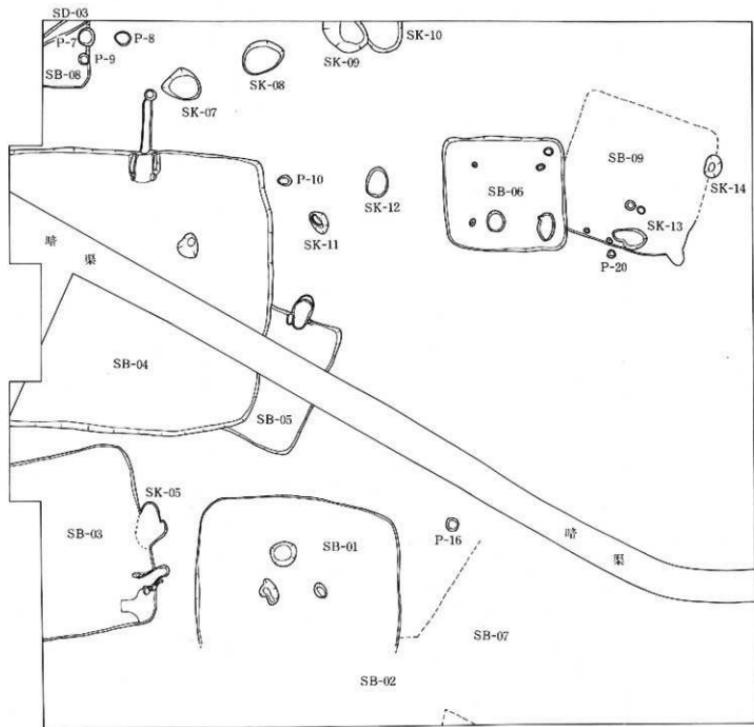
(2) 奈良・平安期の遺物 (第43図41~51)

41~43はA区北側のD-14グリッドから一括で出土した土師器の环である。41は直立する高台に内湾する厚手の杯部を持ち、内面は黒色研磨されている。底部裏面には右廻りの糸切り痕が微かに残る。42は内湾して立上がり、口縁部で直線的に外傾する器形の环で、高台を持つものと思われる。43は外面に緩い棱を持って11縁部が外反する器形を持ち、底部は右廻りの回転糸切りの後、刷毛で軽く調整されている。44は第4号住居址覆土上層から出土した須恵器長頸瓶で青灰色を呈し、内面には殆ど剥落しているが淡緑色の自然釉がかかる。45・46は共に第3号住居址覆土より出土した平安期に比定される土師器の高台付环と台付甕の底部で、何れも焼成後に底部が内側から穿孔されている。何らかの意図を持って穿孔したものと思われるが造構に伴わない為、性格は不明である。47はA区E-5グリッドから出土した灰釉陶器の碗である。白灰色の良好な胎土を用いているが作りはやや粗雑で、底部裏面は難なナデが行われ、僅かに糸切り痕が残る。漬け掛けにより淡緑色に施釉されている。なわ、内面底部は平滑に磨滅し黒痕が残り転用碗として用いられた事が知られる。灰釉陶器の転用碗は昨年度調査された上田市坂口ノ一遺跡でも数点出土しており、当時の識字層の広がりを窺わせる。48はA区北側のF-12グリッドより出土した灰釉陶器の輪花碗である。高台断面は三角形に近く、底部裏面は中央部に僅かに糸切り痕が残る。厚手の作りで漬け掛けにより淡緑色に施釉されている。外面には窓で沈線が刻まれており、輪花は5ヶ所と思われる。47・48は共に11世紀代の東濃系の製品と推測される。49はA区F-6グリッドより出土した内面黒色研磨された土師器の碗で内湾して開く器形を持つ。底部は切り離し後手持ち窪削りされ、奈良期に比定される資料である。50・51は第4号住居址覆土上層から出土した土師質上器で、50は底部に右回転の糸切り痕が残る环である。51は柱状高台と呼ばれる擬似高台を持つ皿である。底部には右回転の糸切り痕が僅かに残り、高台端部は面取りされている。柱状高台を有する环・皿は、足高台を持つ环・皿と前後して11~12世紀に山梨、長野県を中心に分布するとされるが類例はまだ余り多くなく、東信地方に於いては小県郡東部町大門川遺跡、小諸市五ヶ城遺跡第15号住居址、佐久市蛇塚B遺跡H-4号住居址等で若干出土しているに過ぎない。⁽⁴⁾しかし今後、類例の増加が予想され、古代から中世への移行期の土器として注目される。

(塩崎)

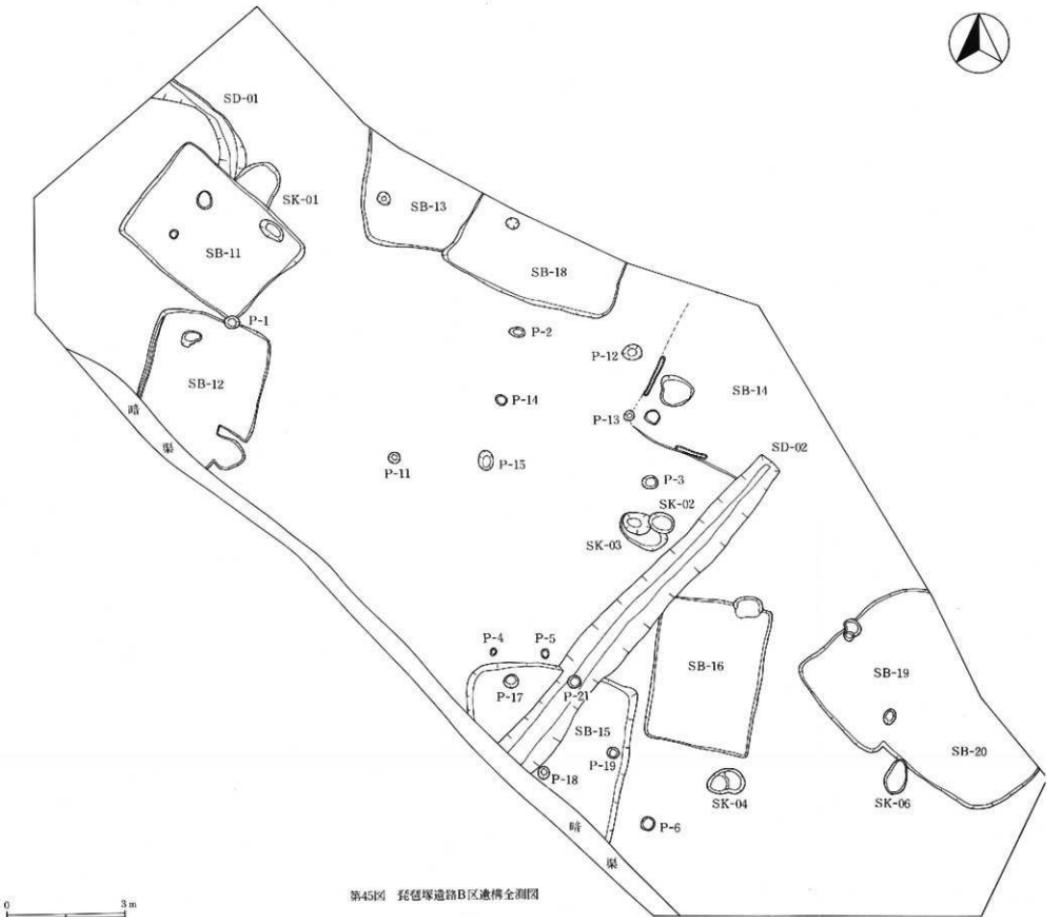
註

- 1 児玉卓文他 1981『長門町中道』長門町教育委員会
- 2 塙入秀敏他 1986『坂口ノ一遺跡の調査』「五反田遺跡」上田市教育委員会
- 3 児玉卓文他 1979『大門川遺跡』「滋賀寺遺跡群発掘調査報告書」東部町教育委員会
- 4 花岡 弘他 1981『五ヶ城』小諸市教育委員会
- 5 林 幸彦他 1980『蛇塚B』佐久市教育委員会



第44图 凤慈冢道路A区遗物全测图

0 3m



第45図 凤凰塚道路B区遺構全剖面

第4章 まとめ

今回の琵琶塚遺跡の発掘調査で検出された遺構、出土した遺物は、すでに述べた通り弥生時代後期後半期、弥生時代最終末期ないし古墳時代初頭期、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良時代末期ないし平安時代前期、平安時代後期の6時期に分けることができる。それぞれの遺構・遺物については第3章で述べてあるので詳細は省略し、また、次年度にも引き続き調査が行われるのでその結果も含めた全体的な考察に多くはゆずるとして、ここでは各時期に分けて若干の考察を加えるにとどめておきたい。

1. 弥生時代後期後半期

この時期にかかる遺構として明確なものは、第2号溝址 (SD02) やび第12号土壙 (SK12) のみで、住居址は1軒も検出されていない。

第2号溝址 (SD02) は、弥生時代最終末期ないし古墳時代初頭期に所属する第15号住居址 (SB15) に切られている。壺・壺・高環・鉢・蓋など典型的な弥生時代後期後半期の箱清水式期に属する土器を出土しており、3世紀後葉に位置させられよう。幅124~66cm、深さ60~33cmで逆台形を呈するこの溝址は、途中で屈曲する気配を示さず、段丘崖端部に向かい段丘崖線に直交するように直線的に延びているらしい。しっかりした溝であるが、人為的に大量の水を流した痕跡は認められず、水路とは考えにくい。また、防衛の目的をもつものとしては規模が小さい点でこれも想定しがたい。とすると、此と彼とを画する境界線の意味をもつ施設、環溝と考えるのが妥当であるように思われる。

第12号土壙 (SK12) はすんぐりした長円形・鍋底状土壙であるが、壺・壺各1個体が出土した。いずれも口縁部を下にした倒位の状態で出土しており、体部下半を欠いている。しかし、体部下半欠損は土壙検出時にすでに欠損部が見えていたことを考えると、後世の耕作などにより破壊された可能性が高い。問題は2つの土器が倒位の状態で出土したことである。土壙は土器の大きさに合わせて掘られたものようで、他の何ものでも入れる余裕をもたない。すなわち、土器を伏せた状態で格納するための壙であり、墓壙などとは考えにくい。豪強付会は避けたいが、隣接する第4号住居址 (SB04) が古墳時代初頭の遺構を破壊して築造されているらしいことを考え合わせると、この土壙も屋内施設であった可能性もある。壺の頸部以上が短く外反が弱いこと、頸部文様が簡略化されていること、無彩であることなどから、弥生時代後期後半箱清水式期の中でもその後葉に位置づけられよう。

以上2つの遺構について考えてみたが、琵琶塚の地に人が痕跡を残したのはこの時期が初めてであり、他の包含層出土遺物をも考え合わせると、弥生時代後期後半箱清水式期でもその後半から後葉、3世紀後葉から末葉に位置されると思われる。そして、第15号住居址 (SB15) に代表される弥生時代最終末期ないし古墳時代初頭期に連続するものであった。

2. 弥生時代最終末期ないし古墳時代初頭期

第15号住居址 (SB15) の他、第13号住居址 (SB13)、第19号住居址 (SB19)、第20号住居址 (SB20) 及び第4号住居址 (SB04) 付近の包含層出土遺物などがこの時期に所属させられ得る。

第15号住居址 (SB15) は、弥生時代後期後半期に属する第2号溝址を切って構築されており、暗渠排水路の関係で全容を把握できなかったが膨大な量の遺物を出土した。箱清水式土器の範疇に入る壺・甕・高环・鉢・片口・瓶・蓋などの他に、東海地方西部より搬入されたと思われるS字口縁台付甕、それを模倣したもの、搬入されたものと胎上・焼成が酷似する壺、北陸地方の影響を受けた甕、鉄石英製の細形管窓、ガラス小正などであり、器台が伴う。これらの内、箱清水式土器の範疇に入る壺・高环・鉢・片口・蓋は赤色塗装されたものが殆どで、これら保守的な器種は典型的箱清水式土器と言ってもよいものばかりであるのに対して、甕は器形に胴太・短編化が見られ、頸部の簾状文は省略され雑な波状文のみが施されるものが多く、終末的様相を示し始めていると言える。弥生末期の生産様態の変化・発展による在地の土器の内からの自律的な変容と、東海地方・北陸地方あるいは畿内からの文化伝播による他律的変容とがあいまって一つの時期を画し、千曲川流域では御屋敷式土器の時期ということになる。本遺構出土の土器はS字口縁台付甕の特徴などから、御屋敷式土器の内でもII式土器に併行するものと思われ、4世紀初頭という実年代が与えられよう。

第13・19・20号住居址 (SB13・19・20) はいずれも遺構の切り合いや調査区域の都合で全容が把握できなかった。出土遺物も少ないが、第13号住居址 (SB13) からは後出的な特徴をもったS字口縁台付甕が、第19号住居址 (SB19) からは器受部に貫通孔をもたず脚部に円形透し孔を有する器台が、第20号住居址 (SB20) からは刷毛調整の著しい球形の小型甕がそれぞれ出土している。いずれも古墳時代初頭に位置づけられるもので、4世紀の前葉ないし中葉が考えられる。

第4号住居址 (SB04) 付近の包含層と一部同住居址及び第6号住居址 (SB06) の覆土上層より出土した土器には、有段口縁の壺、S字口縁台付甕、つまり上げた面取状のU縁部をもつ甕の他に小型丸底壺及び小型鉢がある。特に後二者は古式土師器の内の小型精製土器と呼ばれるものだが、小型丸底壺は精製とは言いがたく精製品を模倣して作られたものであろう。それに対して兜鉢型土器とも呼ばれる小型鉢は、器肉薄く良く研磨され焼成堅緻なものが多く、畿内よりの搬入品であろうと思われ、畿内編年の布留1式に属するものである。この小型鉢は長野県内では出土例が少なく、飯田市恵川遺跡・伊那市堂垣内遺跡・茅野市下蟹川原遺跡の天竜川流域を中心とした南信地方に集中しており、東北中信では本例が初出例である。東日本では約50遺跡を数えることができるが、個体数の多さでは2、3番目に位置するという。つまり上げた面取状のU縁部をもつ甕も河内など畿内に粗型を求めることができ、その他の遺物をも含め、畿内より東海地方西部を通じての政治的な大きな波の波及があったことが感じられる。なお、この特徴的な遺物の集中は、遺構こそ検出できなかったが、第4号住居址 (SB04) により破壊されたと考えられる該期住居址の存在を示唆していると言える。時期的には、古墳時代最初頭の4世紀前葉に比定できる。

3. 古墳時代中期

第6号住居址(SB06)、第11号住居址(SB11)がこの期に属す。前者は一辺3.1m×2.9mの隅丸方形、後者は4.2m×2.9mの隅丸長方形を呈し、カマドをもたず、深く掘り込まれている。両住居址とも出土遺物は多くなく、特に後者は岡上復元すら不可能な小片ばかりである。前者はかろうじて丸形の球形無頭蓋が出土しており、一応5世紀後半と時期比定できる。方形と長方形の平面プランの相違が何を示すものか明らかでないが、所属時期の差であり、第11号住居址(SB11)がやや先行すると解しておきたい。

この時期は近接する和合將軍塚古墳の出現する前後であり、この地域の経済基盤が拡大・安定して、一人の首長の下に権力が集中してゆく時期である。その意味で、この時期の集落は規模・数の両面で前代に比し倍増したと思われるが、現在までのところこの2軒の住居址が初めての発見である。今後の資料の増加をまって発言せねばならないが、和合將軍塚古墳築造という形で具現してゆく権力構造と、それを支えた基盤について究明する材料の一つとなりうるものである。

4. 古墳時代後期

第3号住居址(SB03)と第4号住居址(SB04)がこの時期に所属する。隣接して検出されたが、出土した遺物の特徴は勿論、住居址主軸線の方位、カマドの位置などいくつもの点で相違があり、時期的な差と理解される。前者は後期前半でも後葉の6世紀後半、後者は後期後半前葉の7世紀前半という実年代が与えられよう。

この両者の内、第4号住居址(SB04)は特に注目に値する。北壁中央に設けられた立派なカマド周辺より多くの遺物が出土し、面取の口縁部をもち胴が球形に強く張る大型壺1・胴が張り小さな底部をもつ大型壺1・長胴壺3・小型壺2・短頭で球形肩の小型壺1・鉢1・多孔の瓶1の10点より組成されるセットは、この地方における該期の土器セットとしては非常に良好な資料であり、信州大学織維学部敷地遺跡出土資料とともにメルクマールとなるものである。

古墳時代後期に至るとこの地域にも横穴式石室を有する古墳がいくつか築造される。いずれも直径20m以下の規模の大きくないう円墳ばかりである。山腹や台地上に単独で立地するもののほか、小泉1~5号墳のように群集するものも見られる。これら古墳が実年代の上でどのように位置づけられるかは殆ど研究が進んでいないが、有力な家父長制の大族の家族墓として古墳が築かれるようになったその背景として経済基盤や集落があり、その内部で権力構造の変化が起こっている事実が存在する筈である。そのような古墳時代社会の実態解明のため集落遺跡の調査が持つ意味は大きく、今回の調査も僅かではあるが貴重な資料を提供することになった。

5. 奈良時代末期ないし平安時代前期

実年代としては、8世紀末葉ないし9世紀前葉と考えられる時期に所属する遺構として、第5号住居址(SB05)、第18号住居址(SB18)がある。本遺跡のこの前の時代、すなわち古墳時代後期からは凡そ150年程たって出現した。遺構は2軒の住居址のみで多くはないが、僅かに出土した遺物のうち、特に壺の特徴などからこの時期に比定できるものである。

遺跡・遺構の爆発的増加をみる平安時代後期に先立つ時期として、条里地割が施工される前夜として、浦野川流域谷平野の開発の歴史解明のためには、資料不足の感があつただけに貴重な資料となろう。

6. 平安時代後期

前の時代からは150年程の断絶があり、平安時代後期になって再び集落が營まれ始めている。この時期に属する遺構としては、第1・2・7・9・12・16号住居址 (SB01・02・07・09・12・16) のほかに土壙・ピットがある。遺構の数の上では5時期の内で最も多い時期ではあるが、その遺構の数に比し遺物の量は決して多くはない。また、数的には多く検出されたとは言うものの、包含層の黒色土層中に築かれているものが多く、床面から追求しても平面プランを明らかにし得なかつた住居址が過半数を占めているのが実情である。このような中で、第1号住居址 (SB01) 及び第12号住居址 (SB12) が遺構・遺物ともに比較的良好な状態で把握できる数少ないものである。

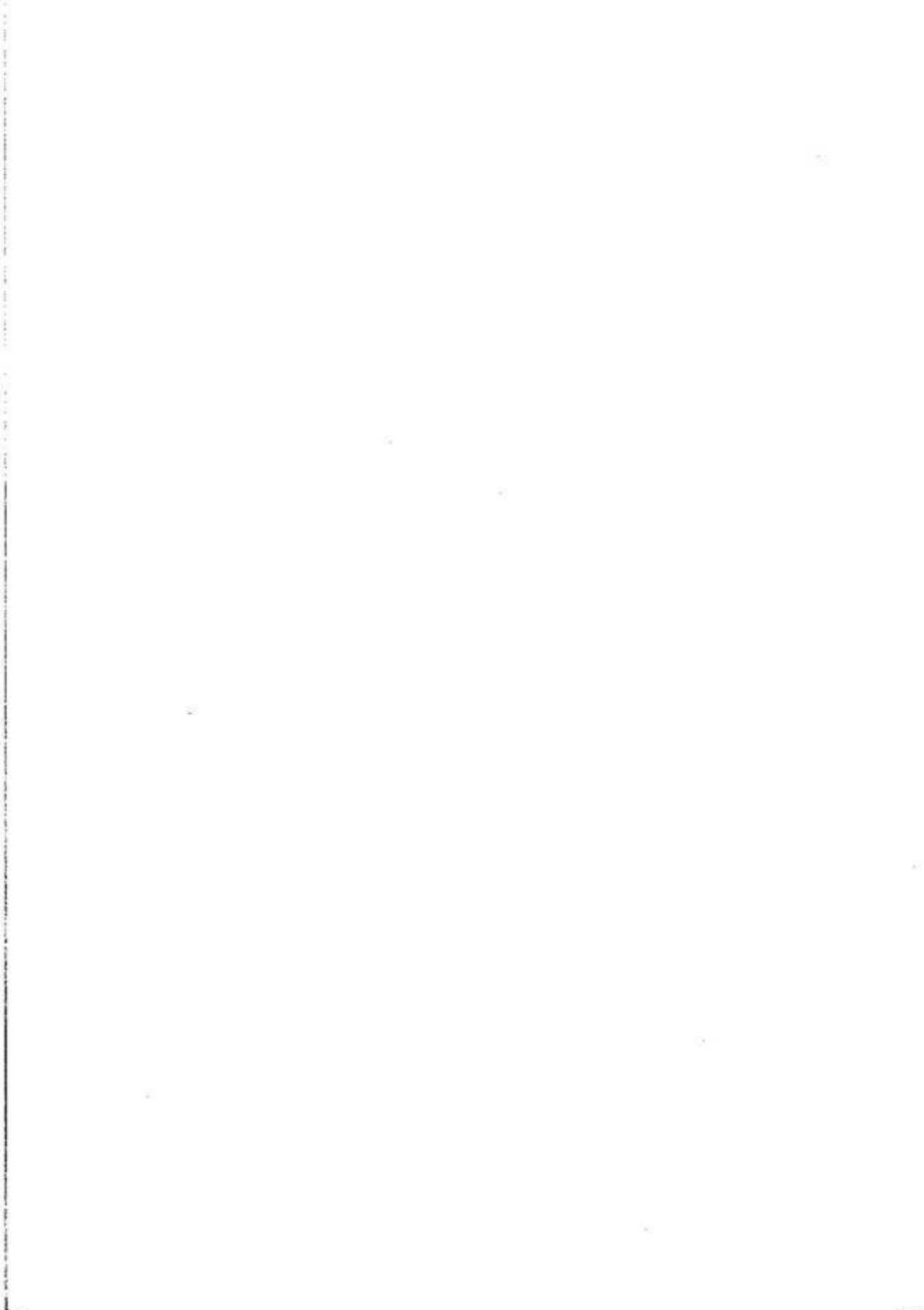
第1号住居址 (SB01) は須恵器をもたず土師器と灰釉陶器で組成される遺物を出土している。遺物量は少ないが、土師器の壺・皿がまとまって出土したのが目を引く。土器組成のあり方や高台の高い所謂足高高台付壺の存在、東濃系灰釉陶器の特徴などから10世紀後半に所属させられるものであろう。

第12号住居址 (SB12) は高台をもつ大小の壺と長さ23.2cmをはかる刀子等の出土を見たが、この時期の一般住居における利器としては、せいぜい刀子があげられるにすぎず、刀子は生活必需品と考えられている。しかし、実際には酸性土壤の問題などにより鉄製品の残存率は低く、住居址からの刀子の出土例はあまり多くない。その点、本址出土の刀子は何片かに破損してはいるが貴重な例であると言える。

この時期の琵琶塚の集落は、「倭名類聚抄」記載の「摂田郷」を形成する一集落であった筈である。そして、松本平の条里遺構の調査でその所属時期は平安時代末期ということが明らかになつたように、川西条里水田もおそらくこの時期の後1、2世紀の間に設計施工されたものであろう。また、生産性・生産力の向上により、有力名主（みょうしゅ）層は更に成長して開発領主化して後の「小泉庄」の莊官となつていったと思われる。広範な該期遺跡の存在がそのことを物語つており、本遺跡もそのような歴史事象を支えていたことは想像に難くない。

昭和62年度には隣接地を対象に第2次の発掘調査が計画されているので、上述のことを更に発展させられる事実や補完する結果が得られるであろう。そして、他の遺跡の調査結果と相まってこの地区の歴史は解明されてゆくものであるから、それらが蓄積される後日に期したい。

図 版





琵琶塚遺跡遠景（浦野川対岸より）



琵琶塚遺跡A区全景（東方より）



琵琶塚遺跡遠景（南方より）



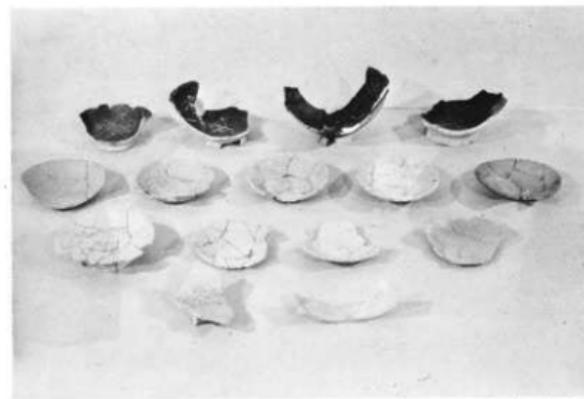
琵琶塚遺跡B区全景（西方より）



第1号住居址（南方より）



第1号住居址遺物出土状況



第1号住居址出土遺物



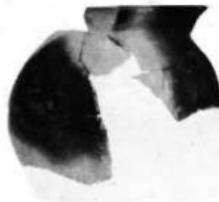
第3号住居址（西方より）



第3号住居址カマド



5-1



5-2



5-7

第3号住居址出土遺物



第4号住居址（南方より）



第4号住居址カマド周辺遺物出土状況



第4号住居址カマド



第4号住居址遺物出土状況



9-1



9-2



10-6



11-18



11-19



10-8



10-9



11-28

第4号住居址出土遺物



12-29



12-30
第4号住居址出土遺物



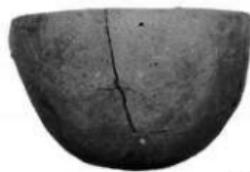
12-38



第5号住居址（南方より）



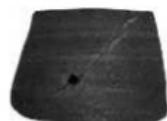
第5号住居址カマド



15-7

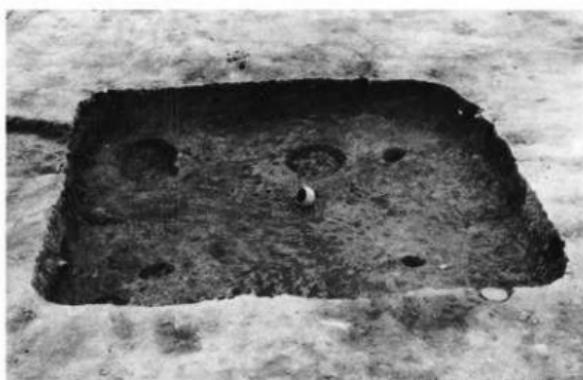


15-8



15-6

第5号住居址出土遺物



第6号住居址（北方より）



17-1

第6号住居址出土遺物



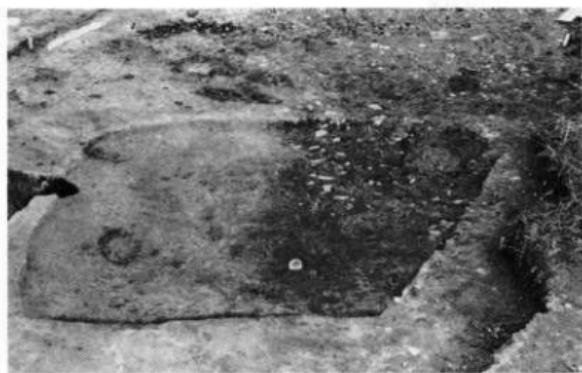
第8号住居址（北方より）



第9号住居址（北方より）



第11号住居址（南方より）



第12号住居址（西方より）



24-4



24-5



24-6



24-8



24-9

第12号住居址出土遺物



第13号住居址（南方より）



26-5

第13号住居址出土遺物



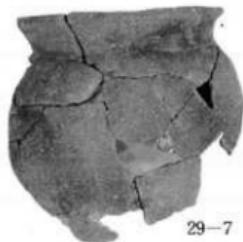
第15号住居址（南方より）



第15号住居址遺物出土狀況



28-4



29-7



29-10



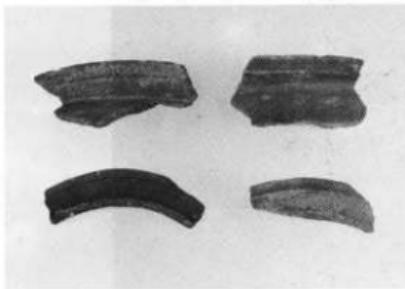
29-14



29-13



29-15



29-2,3,4

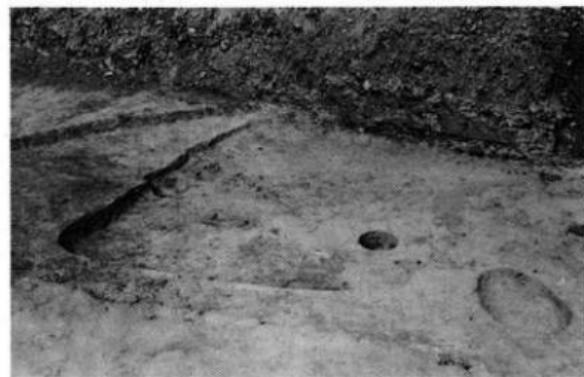
第15号住居址出土遺物



第16号住居址（南方より）



第18号住居址（南方より）



第19号住居址（南方より）



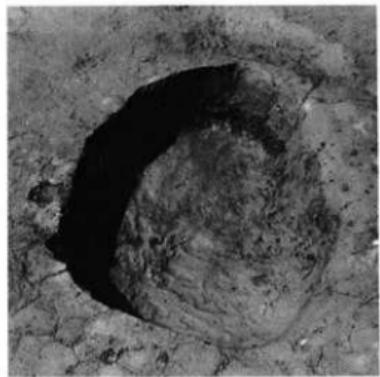
第20号住居址（南方より）



35-2

35-3

第19・20号住居址出土遺物



第12号土壤（南方より）



37-1



37-12

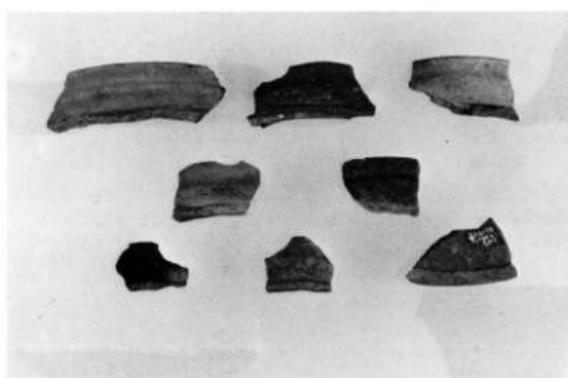
土壤出土遺物



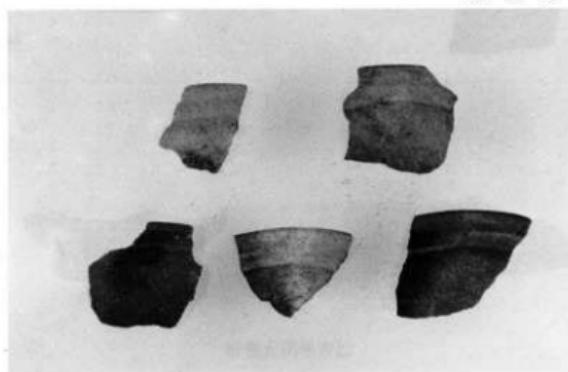
第13号土壌（西方より）



第2号溝址（北方より）



42-19~26



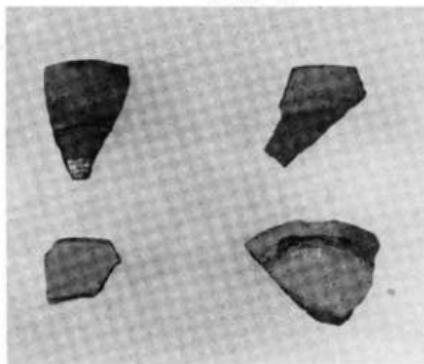
43-27~31



43-34



43-35



包含層出土遺物

43-32·33·36·37



43-38



43-41



43-43



43-44



44-47



44-51



44-48

包含層出土遺物



琵琶塚遺跡發掘調査團

あとがき

本遺跡は、小泉地区圃場整備事業の昭和61・62年度工事区域にまたがって所在し、61年度には約40000m²の遺跡範囲の約2/3が工事対象区域に含まれていた。そのため、発掘調査も2次に分けて実施することにした。しかし、予算規模はすでに決定しており、着工期日も迫っているという限られた中での調査であったため、遺跡全城にわたる調査はきわめて困難であった。そこで、水田一筆ごとに試掘トレンチを入れ、遺構・遺物の出上りの最も濃密な地点に調査区域を設定したが、調査区域外において多くの遺構と夥しい遺物がブルドーザーにより掘り起こされてしまったことは恥愧に堪えない。しかし、限られた範囲での発掘調査には自ずから限界があり、市教委・調査団とともに全力を尽くしたつもりである。我々が反省しなければならないのは寧ろ事前の対策・措置にあり、埋蔵文化財の保護・活用のために一層努力してゆく覚悟である。

さて、今回の発掘調査は約500m²という狭い面積を対象にしたものであったが、一時期絶がるもの、弥生時代後期から平安時代後期に至る時期の集落址であることが判明し、それに伴なう多くの遺物が出土した。特に、弥生時代最終末期の住居址・遺物と古墳時代後期後半7世紀の住居址・遺物はともに良好な資料で、浦野川流域は勿論、上田小県地方の該期研究には必要欠くべからざるものとなった。その他にも多くの新知見や成果を収めることができ、現今埋蔵文化財を取りまく厳しい情勢の中では一応の評価が得られるものと思われる。

調査は7月下旬から8月下旬にかけての1ヶ月にわたり行われた。炎暑の中作業に従事された方々には本当に頭の下がる思いである。地元をはじめ中には遠くから通ってきてくれたおじさん・おばさん達、大学生・短大生諸君、上田小県誌編纂委員の先生方など多くの方が、乾燥してすぐに固くなってしまう粘土と暗渠から吹き出す水による泥漿とに悩まされながら奮戦して下さった。特に記して感謝申し上げたい。また、森嶋稔主幹をはじめとする千曲川水系古代文化研究所所員の方々、長野県史刊行会の笹沢浩氏、岡谷小学校教諭青木一夫氏には、色々とご指導ご助言やご協力を賜った。心からお礼申し上げる次第である。最後に、長野県教育委員会文化課、上田市教育委員会社会教育課のみなさんのご尽力と、圃場整備事業関係者各位のご理解に対して敬意を表するとともに、100名を超す現地説明会への参加者の多さに光明を見出し、昭和62年度調査へ更なる期待を抱いてあとがきとしたい。

(塩入秀敏)

上田市文化財調査報告書第28集

琵琶塚

琵琶塚遺跡緊急発掘調査報告書

発行 1987年3月31日

上田市教育委員会

上小地方事務所

印刷 田口印刷株式会社